

## モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能

井島 正博

### はじめに

最初に断っておきたいことは、本稿では、モノ・コト・ワケのような名詞が、それぞれの用例で「実質名詞」として用いられているか、「形式名詞」として用いられているかとか、モノダ・コトダ・ワケダが、それぞれの用例で「名詞＋断定助動詞」として用いられているか、「助動詞」として用いられているか、というような品詞論的な議論は行うつもりはない。品詞論的な議論は、さまざまな構文的特徴を挙げながら、結局はだからこの語は「…詞」なのだ、と品詞認定が結論になってしまふ。それでは生産的ではない。むしろ興味深いのは、その議論の途中で挙げられる構文的な特徴の方である。無論、議論の中で品詞名を使わないうというわけではない。モノ・コト・ワケのような名詞を「形式名詞」、モノダ・コトダ・ワケダで結ばれた文を「形

式名詞述語文」と呼ぶのをはじめ、議論に必要な限り、品詞名を用いる。しかしそれは、ある語や表現のカテゴリを指すために用いるのであって、ある語がどの品詞に属するかを結論にすることはないということである。

もう一点、本稿では、モノダ・コトダ・ワケダなどを「説明のモダリティ」であるというような、前提的な分類をするようなことはしない。階層的モダリティ論の立場に立てば、モダリティは命題を包む形でとらえられる、言い換えればモダリティは命題の外にあることになる。線条的な文において命題の外とは、文頭か文末であることになるが、文頭とは副詞の位置であり、文末はおよそ助動詞が位置する。そして確かにモノダ・コトダ・ワケダなどは、推量助動詞とほぼ同じく、文末に用いられることが多い。しかしながら、文末以外に、条件節などに用いられることも稀ではないし、「発話時における話し手の心的態度」を表わすも

のといった、モダリティの定義にも当てはまらない。形式名詞述語文は、「発話時」におけるものでなくともよいし、「話し手」のものでもなくてよい。さらに、「説明」というものが他のモダリティの働きと対等な概念であるとはとても言うことができない。ここではそのような予断は捨てて、できるだけ実際の用法に即して、その背後にある文法的な仕組に肉薄していきたい。

## 1 モノダ・コトダ・ワケダ文の統語論的な相違

―特に連体修飾の仕方に注目して―

ノダについてはこれまで詳細に検討を加えて来た。続いて、モノダ・コトダ・ワケダなどの形式名詞述語文に関しても、ノダ文と共通の観点から検討していくつもりであるが、まず最初に問題にしたいのは、ノダ文の場合には、その主要な機能としては一般的に〈説明〉と言われてきた、すなわち吉田(二〇〇〇・三)の術語では〈文間表現効果〉が主として論じられてきたのに対して、同じ形式名詞述語文ではあっても、モノダ・コトダ・ワケダ・ハズダ文の場合には、後に見るように、さまざまな〈文内表現効果〉ばかりが論じられてきたが、それはどのような事情によるものか、ということである。

たとえばモノダ文の主要な意味類型としては、(一般論)

〈当為〉〈希望〉〈詠嘆〉〈回想〉などが、コトダ文の主要な意味類型としては、〈当為〉〈回想〉などが、ハズダ文の主要な意味類型としては〈推論〉〈納得〉などの〈文内表現効果〉が挙げられる。ただし、ワケダ文に関しては、〈理由説明〉のような〈文間表現効果〉および〈納得〉などが挙げられる。それぞれに關しては後に詳しく検討するとして、このように多くの用法が〈文内表現効果〉である。

このことに関しては、モノ・コト・ワケの意味も十分に希薄ではあるが、ノの意味はそれ以上にほとんどそれだけでは意味が抽出できないほどに希薄であることがその理由であるように思われる。それでは意味がそれほどに希薄であることが、どのようにして〈文間表現効果〉を表わすことに結び付くのだろうか。この点に關してはすでに井島(二〇一〇・三、一〇・一一)でも検討を加えた。すなわち、まず第一に、ノダ文の最も基本となる意味は「認識者の認識内容」を表わすことであると考えた。その上で、ノダが用いられる環境によって、さまざまな影響されて次第に用法が具体的に定まっていくと考えた。ノダ文が最も多く用いられるのは文末であるが、文末すなわち主文は、話し手が事実であると信じていることを述べるのが原則である。(1) a のような言い切りの場合、単に眼前の事実を描写している表現であると考えられるが、眼前の事実を述べるということを認識のレベルまで下げれば、話し手が眼前にその

ような事実があると信じている内容を述べていると言うことができる。文末とは、このような環境であると考えられるが、これによって、ノダ文の最も基本となる意味「認識者の認識内容」のうち、「認識者」には「話し手」が、「認識内容」には「信念」（話し手が事実であると信じている内容）が充填されて、「話し手の信念」を表わすことになると考えられる。すなわち、(1) bのような文末ノダ文の機能は「話し手の信念」を表わすことであると考えられる。

(1) a 雨が降っている。

b 雨が降っているのだ。

しかし、これでは(1) aのような単なる言い切りの形でも話し手の信念を表わすのであれば、(1) bのような文末ノダ文が「話し手の信念」を表わすということは、単に機能の重複ということになり、言い切りの文と文末ノダ文との区別は付かないことになってしまう。とはいっても、言い切りの文は結果的に話し手の信念を述べることになるのであるが、話し手の認識としては単に事実を述べているつもりであろう。それに対して、文末ノダ文は、話し手の認識としても「話し手の信念」を述べているというつもりを表立たせた表現になっているのではないだろうか。ここで話し手が「話し手が事実であると信じている」ということを積極的に示そうとする場合はどのような場合であるだろうか。それは第一に、聞き手ないし（一般的）第三者の認識

と話し手の認識との間にギャップがある場合(2) a、第二に、発話時直前の話し手の認識と発話時の話し手の認識との間にギャップがある場合(2) b) が考えられる。すなわち、そのように他者ないし発話時直前の話し手と、(発話時の)話し手との間にギャップがあれば、あえて当該の内容が「話し手の（発話時における）信念」であることを明示することに意義が生ずることになる。

(2) a A: どうして傘なんか持っていくの？

B: 雨が降っているんだ。

b (急に涼しい風が吹いたので空を見上げて)

雨が降っているんだ。

振り返って(1) aのような言い切り文の場合には、他意なく、眼前に接した事実に触発されて、反射的にその事実を述べる場合に用いられると考えられる。とすると、聞き手の側でも、言い切り文に対してはそれ以上の意図の究明ないし勘ぐりは行わないであろう。それに対して文末ノダ文を用いた場合には、聞き手がそのことを知らない、信じていないなど話し手と聞き手との間に認識のギャップがある場合、または発話時直前まで話し手が知らなかった、失念していたなど発話時直前の話し手と発話時の話し手との間に認識のギャップがある場合などに用いられる。言い換えれば、文脈上(ここで「文脈」というのは(2) a・bに見るように、言語化されたものも、発話が行われる非言語的な

状況も含む)、当該の文末ノダ文の内容がその場で発話されることが求められているということである。これを聞き手側から言えば、あえて「話し手の信念」をそこで提示するのはどうしてなのか、発話のきっかけを推測することになる。

これを談話の流れとして外に立って見てみると、きっかけとなる先行発話や言語外の状況に対して、文末ノダ文が何らかの意味で(説明)をしているように見えることが多い(再び(2) a・bを参照)。きっかけの部分の内容を「被説明項」、文末ノダ文の内容を「説明項」と呼んで相互の関係が論じられることもあった。これが文末ノダ文が(文間表現効果)を表わしているように見える仕組であると考えられる。

かいつまんで文末ノダ文の表現の仕組について振り返ったが、これに対してモノダ・コトダ・ワケダ・ハズダ文の表現の仕組は、あるところから文末ノダ文とは袂を分かつことになると思われる。その原因は、モノ・コト・ワケはいかに希薄であるとは言え、ノよりは実質的な意味を持っている点に求められる。ただ、モノダ・コトダ・ワケダ文もノダ文と同じく形式名詞述語文であるところからして、最も本質的な意味としては「認識者の認識内容」を表わすものと考えられる。そしてこれらが文末に用いられる場合には、「認識者」のところに「話し手」が代入されるのは共

通しているとして、「認識内容」のところにはノダ文のように「信念」が代入されるのではなく、モノ・コト・ワケの実質的な意味に即した内容が代入されるものと考えられる。

まずモノとコトであるが、井島(一九九八・二)において、以下のような形式名詞と形式名詞述語文の対応を示した。すなわち、形式名詞モノの持つ1物品性、2間主観性(客観性)、3不変性という特徴が、形式名詞述語文となると、1の物品性は維持できずに事態性になるが、2の間主観性(客観性)は受け継ぎ、3の不変性は事態に関わるものとして普遍性・汎称性・一般性となる。また形式名詞コトの持つ1事態性、2主観性/間主観性(どちらの場合もあるということ)、3推移性・変化性という特徴が、形式名詞述語文となると、1の事態性、2の主観性/間主観性はそのまま受け継ぎ、3の推移性・変化性は文の特徴として一回性・特称性・特殊性となる、というような考察を行った。

	形式名詞	形式名詞述語文
ノ	1 物品性	事態性 (物品性は消滅)
	2 間主観性 (客観性)	間主観性 (客観性)
モ	3 不変性	普遍性・汎称性・一般性
	1 事態性	事態性
ト	2 主観性 / 間主観性	主観性 / 間主観性
コ	3 推移性・変化性	一回性・特称性・特殊性

図表一

しかるに、このように形式名詞のモノ・コトの意味から、形式名詞述語文のモノダ・コトダ文の意味が一足飛びに生ずるわけではなからう。もう少し丁寧に統語的な形式名詞述語文の成立の経緯をたどることによって、さらに精密な議論をすることが求められるだろう。そのような観点で、モノダ文・コトダ文・ワケダ文を見比べてみると、モノ・コト・ワケに対する連体修飾の仕方に顕著な違いが見られる。ちなみに奥津(一九七四・九)では、連体修飾の仕方を同一名詞連体・同格連体・相對連体・付加連体に分け、寺村(一九七五・八、七七・三、七七・九、七八・三)では、同一名詞連体を内の関係、それ以外を外の関係と呼んだ。以下では分類の仕方が精密な奥津(一九七四・九)の術語を用いることにする。

まずモノダ・コトダ文について考えてみると、モノは命題の一項となるために、連体修飾を受ける場合には同一名詞連体となるはずであるのに対し、コトは命題全体に対応するために、連体修飾を受ける場合には同格連体となるはずである。

(3) a クギを打つモノ (そのモノでクギを打つ)

b クギを打つコト (そのコトクギを打つ)

実際、モノが連体修飾節を受ける場合、(4) a は「(そのモノを) 貞子が見ている」、(4) b は「(そのモノを) 大学生が破いた」、(4) c は「(そのモノが) 頭の上におっかぶさっていた」のように、モノを補文の中の要素として代入することができる。すなわち、同一名詞連体となっている。

(4) a 「おねえさまなら、『貞子の見ている』ものがよくお見えになるわね。でも、おねえさまには、それはまぼろしね。貞子には、それがいのちなの。」

石川淳「処女懐胎」 534

b 鮎太は、その時、「大学生が破いた」ものが、先刻自分が彼に渡し、彼が机の上に置いた牙子の手紙であることを知った。 井上靖『あすなる物語』 36

c 「何だ。貴様、涙なんかこぼして。金を持って泣く奴があるか。陽気になれ。——ああ、きょうは実にくい気持だなあ。おれは『頭の上におっかぶさっていた』ものが、ふっ飛んでしまった。これでやっと泰さんに

も申訳けが立つ。おい、愛川。泰さんは死ぬまで、おまえのことを案じていたんだぞ。貴様は、り、りっぱな人間にならなくっちゃいかんぞ。」

山本有三『路傍の石』935

それに対して、コトが連体修飾を受ける場合は、多くはコトは補文の中の要素とはならず、(5) aではコトの内容が「被験者のそもそもの思考システムに問題があった」であり、(5) bでは「オルガンディーやジョウゼットや、コットン・ボイルや、ああ云うものを単衣に仕立てる」であり、(5) cでは「黒い雨に打たれた」である。すなわち、同格連体となつてゐる。

(5) a 「…これはいろいろと調べてみた結果、「被験者のそもそもの思考システムに問題があった」ことがわかりました。…」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』942

b 近頃でこそ一般の日本の婦人が、「オルガンディーやジョウゼットや、コットン・ボイルや、ああ云うものを単衣に仕立てる」ことがポツポツ流行<sup>はや</sup>つて来ましたが、けれども、あれに始めて目をつけたものは私たちではなかったでしょうが。

谷崎潤一郎『痴人の愛』94

c 「清書は、どれほど進んだか」「ですから、あなたに相談してと思つて、そのままにして置きました。「黒い雨に打たれた」ことが書いてあるんですもの」

井伏鱒二『黒い雨』59

しかし他方、補文に思考・伝達などを表わす動詞が用いられている場合には、モノと同じく、(6) aは「(そのコトを)あれほど筋道を立てて説き聞かせた」のように、(6) bは「(そのコトを)自分の頭の中で考へている」のように、補文の中の要素として代入することができる例も見出される。この場合は同一名詞連体ということになる。

(6) a そこまで読んで賢一郎は、怒りのために自分の顔が熱くなるのを感じた。女の愚かき、女の裏切り。「あれほど筋道を立てて説き聞かせた」ことが、何の役にも立つてはいなかったのだ。 石川達三『青春の蹉跌』360

b 私は得度の折に剃られたばかりの青々とした頭をしてゐた。空気が頭にびったりと貼<sup>は</sup>りついてゐるようなその感覚、それは「自分の頭の中で考へている」ことが、薄い敏感な傷つきやすい皮膚一枚で、外界の物象と接してゐると謂<sup>い</sup>つた妙に危険な感覚だ。

三島由紀夫『金閣寺』73

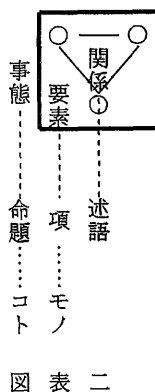
しばしば、モノとコトとの相違を意味論的に追求する議論を見かける。「典型的」には、モノは見たたり触<sup>ふ</sup>つたりできて、時間的な変化をあまり受けないものであり、コトは見たたり触<sup>ふ</sup>つたりすることはできず、経験することしかできないもので、時々刻々と移り変わっていくものである。そこから、モノからは「普遍性・一般性」といった意味を抽

出し、コトからは（一回性・個別性）といった意味を抽出するといったことが行われる。しかしモノやコトの文法的な研究をする上において、そのような「典型的」な意味に基礎を置く方法がどれほど有効だろうか。モノにも、「恋愛」というもの、「社会」というもの」というように、目に見えず触れることもできないものもあり、それこそ「昨日壊れたもの」「時々刻々と変化するもの」というような言い方もできる。コトについても、「古来から言い伝えられてきたこと」「社会で守られてきたこと」といったように、時間的に変化しない場合も容易に考えられる。要するに、先ほど抽出された意味は、モノやコトの用法全体から抽出されたものではなく、これらの「非典型的」な場合を排除して、「典型的」だと思われるものだけから抽出したものであった。しかるに、モノ・ダ文・コト・ダ文の実際の用例を見渡してみると、むしろ多くが「非典型的」な意味、あるいはそこから派生した用法のものである。

しかるに、そのようなモノやコトの意味論的規定とは別に、統語論的な連体修飾の仕方は規則的に限定されている。それにしても、どうしてモノは同一名詞連体を受け、コトは多く同格連体を受けるのだろうか。

これは、認知的にとらえられる事態構造と、それを文の形で表現する文構造との関わりによって説明できるのではないかと思われる。すなわち、認知レベルでは、何らかの

事態は、そこに関わるいくつかの要素とそれらの関係によって構成されている。それが文として表現されると、一つ以上の項とそれらの関係を表わす述語によって構成された全体が命題ということになる。すなわち、事態構造と文構造との対応は、要素が項にあたり、関係が述語（ないし格関係）にあたり、事態全体が命題にあたることになる。



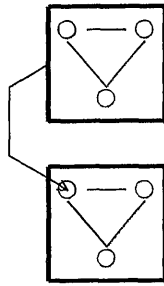
事態構造 文構造

ちなみに、この項（要素）がモノに、命題（事態）がコトにあたると考えられるのであるが、そうであるとするならば、ある要素（項・モノ）を規定するためには、他の要素との関係を述べることになるのに対して、ある事態（命題・コト）を規定するためには、それを構成する要素間の関係を述べることになることは容易に察せられる。

これを文構造で言い換えれば、モノは命題の一項として、そのモノが一命題を構成する内容から、そのモノを除いたものによって特定することができることになるが、これが

同一名詞連体に相当する。他方でコトは命題そのものである。項と述語とを完備した命題内容全体で特定できるのであり、これが同格連体に相当することになる。

しかし他方、何らかの事態は、特に伝達、思考などにおいて、命題を構成する一項として用いられることがある(「...ことを私は聞いた。」「...ことを私は考えた。」など)。これは可逆的に、伝達、思考の場を一事態と見なすと、もとの事態は伝達、思考事態の一要素となることになり、これが同格連体に相当する(「私が聞いたこと」「私が考えたこと」など)。ただし、同格連体で用いられるコトは実例にあたってみても、それほど多いわけではない。



図表三

それではワケダ文は、どのような連体修飾の仕方をするだろうか。ワケは「原因・理由・根拠」などの類義語とすることができ、これらは「結論・結果・顛末」などと対になる表現である。このように因果関係に関わる連体修飾は、付加連体と呼ばれる。付加連体は、結果を表わす名詞に原因命題が連体修飾して、全体として結果の内容に

対応し、原因を表わす名詞に結果命題が連体修飾して、全体として原因の内容に対応する。

(7) a 護岸工事が手抜きだった結果、堤防が決壊した。

「原因命題」+結果||「結果命題」

b 堤防が決壊した原因は、護岸工事が手抜きだったことだ。

「結果命題」+原因||「原因命題」

実際、(8) aは「私が自殺する」という結果をもたらす理由、(8) bは「栄さんにさぶちゃんの苦勞のわからない」という結果をもたらす理由、(8) cは「常々だらしくめそめそしがちの弟が、いやに真剣に地面を見つめて校庭をうろついている」という結果をもたらす理由となっていて、付加連体である。

(8) a それから二三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないように、貴方にも「私の自殺する」訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方ありません。

夏目漱石『こころ』 549

b 「栄さんにさぶちゃんの苦勞のわからない」わけがわかったわ」とおのぶは咏嘆するような口ぶりで云った、

c さて、「常々だらしくめそめそしがちの弟が、いや

山本周五郎『さぶ』 488



に真剣に地面を見つめて校庭をうろついている」わけを藍子は知っていた。周二はボタンを、服やシャツについているボタンを捜し求めているのである。

北杜夫『榆家の人々』 975

このように、モノダ文・コトダ文・ワケダ文はそれぞれ連体修飾の仕方が、同一名詞連体・同格連体・付加連体とまったく異なるという顕著な違いが見られる。従来の多くの研究は、それら構文の意味機能の違いをモノ・コト・ワケという形式名詞が希薄ながら持っている意味の違いに求める傾向にあった。それに対して、本稿ではそれらの構文の意味機能の違いを、統語論的な違いに求めようとするものである。ちなみに、高橋（二〇〇七・三、〇八・三、一〇・三）は、モノダ文に限った議論ではあるが、やはり統語的な違いに注目している。

## 2 モノダ文

モノダ文の用法記述に関しては、これまでの研究でおよそ言っていることは言い尽くされた観がある。ちなみにノダ文の研究は、一文内での意味機能すなわち〈文内表現効果〉という次元で考察するか、文相互あるいは周囲と状況と文との意味関係すなわち〈文間表現効果〉という次元で考察するか（いわゆる〈説明〉説）によって、議論の仕方がま

たく異なってしまうために混乱を来している。それに対して、モノダ文はおよそ〈文内表現効果〉の次元で議論すれば事足りるので、用法記述に関しては大きな障害は見出されない。このことはノの意味は希薄というよりほとんど皆無であるのに対して、モノの意味は希薄ながら存在しないわけではないことと関わりがあるだろう。ただ、その間に挙げられたモノダ文の用法が多岐にわたり、それを用法ごとに同音異義語的な記述を行うにとどめず、各用法に共通する原形から派生したものであると論じようとすると、大きな困難に直面する。すなわち、その「原形」を意味に求めようとすると、およそ（一般性）といったものを抽出せざるをえないが、これではモノダ文の用法の広がりを充分に覆い尽くすことはできない。ここでは、その「原形」を統語的な構造に求めようと考える。

### 2・1 モノダ文の諸用法

まず最初に、これまでの研究でモノダ文の用法にはどのようなものがあり、それぞれがどのような特徴を持っているのか、概観しておきたい。

①（一般論）用法：ある時あるところで起こった一回的な出来事の描写（特称）ではなく、同じようなことが繰り返

し起こることによってそこから抽出された一般的な事態の描写（汎称）に用いられる。

林芙美子『放浪記』 775

(9) a 二人のしぐさは夫婦じみていたけれども、男は明らかに病人だった。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ、まめまめしく世話すればするほど、夫婦じみて見えるものだ。  
川端康成『雪国』 8

立原正秋『冬の旅』 515

b 空腹になると声は涸れるが大きな声を出すものだ。僕は裏の小川で体を洗いながら、芸備線沿いに歩いて帰ったことを大きな声でシゲ子に云った。

井伏鱒二『黒い雨』 618

c 「氷の上が<sup>すべ</sup>にれ出した時はほんとに夢中になるものだ」君は自分の遠い過去を覗き込むように淋しい心のにもこう思う。 有島武郎「生れ出づる悩み」 188

d 「僕の位置にいれば君はそんなあつかましいことは出来なくなる」「恋はあつかましくなければ出来ないものだよ」 武者小路実篤『友情』 92

e 心が留守になっているとつまずきが多いものだ。激しい雨の中を、私の自動車は八王子街道を走っている。

林芙美子『放浪記』 157

f 夕飯を八時頃食べる。いかの煮つけを食べながら、あのひとはいまごろ、何を食べているのだろうかと哀れになって来る。欠点のない立派なひとにも考えられる。お互いの気まずさは別れて幾日もしないうちに消

えてきれいになるものだ。

g 安は、足もとの草をみて、やさしい目になった。「人間、どんな環境にいても、なにを食ってでも、生きられるものだ。そんなことを、俺はここで学んだよ」

この用法では、まず主語には総称名詞が用いられ、固有

名詞は不自然となる。

(10) a ??山田は嘘をついているとまぶたが痙攣するものだ。

b ??花子は買ってもらいたいものがあると優しくなるものだ。

また、あくまで話し手が認識した一般性を表わすもので、誰もが認める普遍的な一般性の表現（若干撞着語法的だが）にはふさわしくない。

(11) a ??水は百度で沸騰するものだ。

b ??水の分子は一つの酸素原子と二つの水素原子からできているものだ。

②〈当為〉用法：開き手に対してあるいは無人称的に、一般論を通してこうすべきだと述べる場合に用いられる。

(12) a 証書は何か<sup>ていし</sup>に圧し潰されて、元の形を失っていた。

父はそれを鄭重<sup>ていし</sup>に伸した。「こんなものは巻いたなり手に持って来るものだ」

夏目漱石『こころ』 184

b 「そうかい、それじゃ早く御出し。そんな事は他が  
気を付けないでも、自分で早く遣るものだよ」母は私  
をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のよう  
な感じがした。

夏目漱石『ころ』 213

c 「話すがいい、立っていた方が話しよければ、その  
ままでいいんだな、たいていのことは話してしまえば  
さっぱりするものだ」外山は静かな眼を加藤に誘うよ  
うに投げかけていった。

新田次郎『孤高の人』 162

d 父親の名は、庄九郎も知らなかった。(知らぬが幸い。  
父親などは、どこのたれであろうとかまわぬ。氏素姓  
などは、自力でつけてゆくものだ)

司馬遼太郎『国盗り物語』 47

モノデハナイの形で、すべきではないという否定的な(当  
為)を表わすこともできるが、他の用法はおよそ否定の形  
で用いることはできない(希望)用法のみ、タクナイモノ  
ダが用いられる。

(13) a 「山はひとりで歩くものではない」加藤は、宮村の  
眼に、いくらかやさしい言葉でいつてやった。

新田次郎『孤高の人』 772

b あめりか陸軍の「ブラック・チェンバア」は一九二  
九年、スチムソン國務長官の時代に、スチムソンの、「紳  
士は他人の信書を読むものではない」という意見で一  
度解散させられたが、

阿川弘之『山本五十六』 1051

c 「誰方でも間違いはあるものです。一時のちよつと  
した過ちで、そんな風に考えるものではありません」

渡辺淳一『花埋み』 29

実際には目の前の聞き手にほとんど命令に近い用いられ  
方をする場合もあるが、その場合も主語には総称名詞が用  
いられ、一般的な当為を述べることを通して、間接的に聞  
き手に行為を促すものであると考えられる。

(窓ガラスを割った子供に)

(14) a ??君が謝りに行くものだよ。

b 君が謝りに行けよ。

c 窓ガラスを割ったら謝りに行くものだ。

主語が総称名詞であるという点が(一般論)用法と共通  
していることから支持されるように、(当為)用法は、聞  
き手がまだ行っておらず、聞き手に実行可能で、話し手が  
聞き手がそのようにすることが一般的に望ましいと判断す  
るような場合に(一般論)用法から派生する、二次的な用  
法である、としばしば論じられるが、恐らく正しいであろ  
う。

③(回想)用法 話し手が経験した過去の出来事を回想的  
に表現する場合に用いられる。多くの場合、反復して起こ  
ったことに用いられ、しばしば「よく」を中心とする反復  
を表わす副詞が共起する。

(15)

a 僕はよく中洲に下りて、ポケットに入れてきたパンをちぎって獣たちに与えたものだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』364

b それらの夏の日々、一面に薄の生い茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たえていたものだった。

堀辰雄「風立ちぬ」148

c 「いつたい、おれは子どもの時分から絵が好きでな、おれの口から言うのもおかしいけれど、村では神童だとか、なんとか言われたものだ。」

山本有三『路傍の石』536

d 「いいや、そんなことじゃねえ。——そうだなあ、十四、五のころかな。まだ国にいた時分のこつたが、おれはよく山へ草かりに行ったものだ。」

山本有三『路傍の石』748

e ——そう、こいらがたしか昔の賄いだった。伊助翁さんが猫背姿で歩いていたものだった。そして、むこうにラジウム風呂と長屋があつて……。あのころはあたしは毬つきばかりしていたものだ。毬つきでは誰にも負けないと威張っていたものだけ。

北杜夫『榆家の人々』1955

f 何年昔になるだろう——十五位の時だったかしら、私はトルコ人の楽器屋に奉公をしていたのを思い出し

た。ニイナという二ツになる女の子のお守りで黒いゴム輪の腰高な乳母車に、よくその子供を乗つけてはメリケン波止場の方を歩いたものだった。

林芙美子『放浪記』256

g 大学に入りたての頃よくきかれたものだ。「あなたは何故大学にきたの」と。私は答えた。「なんとなく」と。

高野悦子『二十歳の原点』280

稀に、一回的な過去の出来事にも用いられることがあるが、若干不自然な印象を受ける。

(16) a 賢一郎はこの娘について、あまり良い印象をもってはいなかった。この五月、康子に呼出されてホテルのロビーで会ったとき、彼女は貧乏学生を見下すような言い方をしたものだった。石川達三『青春の蹉跌』294

b ——しかしながら、あの「日本大地震」の記事を新聞に見て以来、徹吉は何も手につかぬ暗澹とした気持ちで十日余を過したものだった。

北杜夫『榆家の人々』520

④〈感慨〉用法…ある出来事に際会して話し手が何らかの感慨を受けたことを表わす。その出来事は過去でも現在でもよいが、感慨はその場で感じたものである。また、モノダが付く命題は、感慨を受けた事態そのものでもよいし、それによって話し手が下した評価、引き起こされた感情で

あつてもよい。

(17) a そんな風に思い出に導かれるままに、村をそんな遠くの方まで知らず識らず歩いて来てしまった私は、今更のように自分も健康になったものだなあ、と思った。

堀辰雄「美しい村」32

b 世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだと、私は、その時つくづくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいじらしく、哀れに思えてなりませんでした。

谷崎潤一郎『痴人の愛』34

c こんな、下手な駄洒落だじゃれみたいな事になってしまつては、つまらないのですけど、しかし自分たちはその遊戲を、世界のサロンにも嘗さつて存しなかつた頗るすばる気のきいたものだと思ひがついてゐたのでした。

太宰治『人間失格』202

d そう云う声がでんでんに人々の口から喚わめかれた。それにしても船はひどく流されてゐたものだ。雷電峠から五里も離れた瀬にいたものが、何時の間にこんな処に來てゐるのだ。 有島武郎「生れ出づる悩み」122

e 「マアあの二人を山の畑へ遣やつて、親というものはよっぽどお目出たいものだ」奥底のないお増と意地曲りの娘とは口を揃そろえてそう云つたに違ちがひない。

伊藤左千夫『野菊の墓』28

f 私たちの寺には蚊帳かやの数が少なかつた。よく感染し

なかつたものだと思うが、母と私は結核の父と一つ蚊帳に寝、それに更に倉井が加わつた。

三島由紀夫『金閣寺』114

g 各人が種々様々な思考および行動をてんでにしていて、よくアメリカというものが崩壊もせず、国家としてのまとまりを保っているものだと思はれば感心させられたものだ。アメリカ研究家とかアメリカ人はそれをこう説明することが多い。

藤原正彦『若き数学者のアメリカ』533

⑤ 〈希望〉用法： タイモノダ、テホシイモノダ、テモライタイモノダなどの形で、話し手の希望を表わす場合があるが、この〈希望〉の意味合は、タイ、テホシイ、テモライタイが担つており、モノダにはその働きはないと考えられる。「うれいしものだ」「寂しいものだ」など情意形容詞にモノダが下接したものが〈感慨〉用法に入れられるのと同様に、この〈希望〉用法は〈感慨〉用法の下位類であると考えたい。

(18) a 朝、冷たい霧雨が降つてゐた。晩あたりは雪になるかも知れない。久しく煙草も吸わない。この美しい寝ざめを、ああ石油の匂いのブンブンする新らしい新聞が読みたいものだと思ふ。 林美美子『放浪記』553

b 私は生きる事が苦しくなると、故郷というものを考

える。死ぬる時は古里で死にたいものだ」とよく人がこんなことも云うけれども、そんな事を聞くと、私はまた故郷と云うものをしみじみと考えてみるのだ。

林芙美子『放浪記』 566

c 「そうか、家柄は良し、娘さんが良ければ、文太郎の嫁に貰いたいものだ」父はしみじみといった。

新田次郎『孤高の人』 763

d 「ぶるぶるぶる。べつに大きな望みはないけれども、せめてこんな寒い夜には、熱いインスタントラーメンでもたべたいものだ。」井上ひさし『ブンとフン』 4

e 岩竹さんは庄原へ辿りつくまで生きていたいと思つた。仮に最悪のことになつたとしても、汽車のなかで息を引きとりたくないものだと思つた。

井伏鱒二『黒い雨』 551

⑥〈解説〉…何らかの事態、事項について解説・説明する場合に用いられる。小説などには少なく、新聞など読者の知らない事態、事項に解説・説明を付する必要がある資料に多く用いられる。

(19) a これらの対策に原発の地元自治体は納得せず、定期検査で停止した原発を再稼働させるには、何を根拠に安全性を保証するかが問題になつた。そこで国は翌7月、ストレステスト（耐性評価）の導入を決めた。原

発の安全性を確かめるものだが、評価の対象は実現が間に合った安全対策に限られた。

『朝日新聞』一面二〇一二年二月二二日

ただ、小説にも〈解説〉用法ないしそれに準ずる用法が皆無であるわけではない。ただしこれらは主述関係の揃つた名詞述語文である。

(20) a 次にだされた意見は、ガラタ地区に軍を上陸させ、設置してある大砲を破壊し、金角湾内のトルコ艦隊を焼き払う、というものだった。だが、これも、現実的ではないという理由で、多くの賛同を得られなかった

塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』 297

b マツチメーカーから最初にもたらされた情報は、柳と試合をするのに金を払わなくては方法がある、というものだった。

沢木耕太郎『一瞬の夏』 1023

c 最初の頃、ぼくに与えられた仕事は経済新聞や業界内のアナリストレポートに出ている共通記事をいくつかひっぱり出し、そこからひとつの仮説レポートをつくりだす、という少々狡猾な、他人の禪（ぜん）拝借仕事、というようなものだった。

椎名誠『新橋島森口青春篇』 24

d 原島久三のやりかたというのは小人数同一行動第一主義というようなもので、何をするにしても原島を先頭に三人で揃って行動する、というようなものだった

のだ。

椎名誠『新橋鳥森口青春篇』104

e. ハットの鎌田の提案は、編集セクションごとに寄せあつてゐる社員の机の島に野々宮の机をびたりとくつつけたらどうか、というものだった。

椎名誠『新橋鳥森口青春篇』291

しかるに、新聞などに見られる用法も、それ以前に提示された事態、事項に対して解説・説明を加えるものであり、「これは」「このことは」などのような主語を補つても文意にはほとんど影響しない。そのため、この用法はしばしば名詞述語文に近いものであると指摘される。

この他に、演説などで自分の主張を提示する際に用いられるモノダ文などもある。

(21) さうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勵める事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。

〔水平社宣言〕尾方(二〇〇〇・三)より

ただし、この場合のモノは「者」の意で、「私は…者である」という名詞述語文出自である可能性が高く、ここでの議論からははずしたい。

## 2・2 モノダ文の諸用法の関係

### 2・2・1 意味論的説明

モノダ文のさまざまな用法を共通の“原形”からの派生として説明しようとする際、最初に考えられるのは、当該の語(語句)の諸用法間に共通に見出される“本質的意味”を探りあて、そこから諸用法が派生される経緯を示すという方法である。この方法はさまざまな分野で用いられているが、モノダ文に関しては、このやり方を典型的に用いた研究に坪根(一九九四・一一)があり、ここでは(一般性)(一般的にこうこうだ)といった意味的な特徴から諸用法が派生されると論じている。

坪根(一九九四・一一)は、以下のような各用法に共通する意味を想定し、1「本性・性質を表す「ものだ」」(一般論)用法)、2「当為を表す「ものだ」」(当為)用法)、3「説明・解説を表す「ものだ」」(解説)用法)、4「過去の習慣・回想を表す「ものだ」」(回想)用法)、5「感情・感覚を表す「ものだ」」(感慨)用法)の五つの用法を関連付けようとする。

〈仮説〉「ものだ」の意味は、ある主題についてはそれは一般的にこういふ存在だ」とする、わかりやすく言えば、前接する命題について「一般的にこうだ」とい

うことを、話し手の意志・判断として相手に訴えかけることである。

すなわち、結論部分だけを示せば、まず1「本性・性質を表す「ものだ」、2「当為を表す「ものだ」」については以下のようにまとめる。

「ものだ」の文は前接する命題について「一般的にこうだ」ということを表すが、「もの」の前の動詞が「自制的」の場合は「ものだ」で本性・性質を表す。また「もの」の前の動詞が「+自制的」の場合には当為を表しやすいが、文脈の中で、話し手が、話題の当事者も共通の認識を持っていると思っている場合は、「本性・性質」を、話し手が、話題の当事者は共通の認識を持っていると思っている場合は「当為」を表す。

次に、3「説明・解説を表す「ものだ」」については以下のようにまとめる。

説明・解説を表す「ものだ」は、完全なる形式名詞ではないが、非常に形式名詞の「もの」に近く、そこには「一般的にこうだ、ということ」を話し手の意志・判断として相手に訴えかける「モダリティ的要素はない。かろうじて「もの」が前述された内容を指すことによつて、結果的にその解説・説明を表わすことになるだけである。

さらに、4「過去の習慣・回想を表す「ものだ」」の結論

部分では以下のように述べている。

過去において〈あるグループにおいて、そのメンバーであるほとんどの個体も〉〈繰り返す、あるいは継続的に〉という一般性の解釈が可能ということである。この用法には単に事実として過去における習慣的事柄を述べる場合と、話し手に関わるものとしてある事柄を回想する場合とがあり、後者の方が寺村（一九八四）が指摘しているような〈なつかしさをこめた回想〉であると言える。

最後に、5「感情・感覚を表す「ものだ」」の結論部分では以下のように述べている。

感情・感慨を表す用法は「くが一般的だ。それなのにくはそうではない」というように一般性に対して、それに反するという気持ちを表した、つまり、一般性の裏返し表現になっていた。一方の「くたいものだ」はそのままで一般性を表す文であり、また「くたかつたものだ」のように「もの」の前を過去形にすると過去の習慣を表す文になり、どちらかと言うと本性・性質を表す用法に近いものである。

以上を図示したものが以下の図である。





“なモノが背後に想定される用例はむしろ少数に留まるだろう。

以上のように、モノダ文はあまりに用法の広がりが大きいために、意味的な共通性を抽出して、そこからの派生として各用法同士の関係を論じようとする方法論では、破綻のない議論は不可能であるように思われる。ちなみに、尾方(二〇〇〇・三)は、“存在”というさらに抽象的な意味を抽出し、「存在する「もの」を語ることと、存在する仕方を語ることの二面」から、モノダ文の各用法を統一的に説明しようと試みているが、ここまで抽象化するとモノとコトとの相違もとんでしまうことになり、説得的な説明にはなっていないように思われる。

## 2・2・2 統語論的説明

前節のように、モノダ文の諸用法を統括する原理を意味論的に追求しようとする試みは失敗せざるを得ないように思われる。それではそれ以外にどのような方途がありうるだろうか。本稿で支持したいのは、統語論的な説明である。

モノダ文の成立には、次の四段階の統語論的な過程を経ていると考えられる。 $\alpha$ 連体節(同一名詞連体)の構成、 $\beta$ 名詞述語文の構成、 $\gamma$ 異分析、 $\delta$ 文末辞化がそれである。以下、それぞれの過程について簡単に説明を加えていく

い。

### $\alpha$ 連体節(同一名詞連体)の構成

モノダ文が成立する第一の過程として、形式名詞モノに節による連体修飾がなされなければならないが、第一節で見たように、事態構造の中では事態を構成する要素に対応するモノは、命題構造の中では命題を構成する項となる。したがって、節による連体修飾をする場合、その項が属する命題が連体修飾節としてモノを修飾することになる。このようにして成立した連体修飾は同一名詞連体となる。

「(そのモノで)クギを打つ」モノ

このような特徴は、形式名詞モノに限ったことではなく、いわゆるモノ名詞(「人」、「本」、「車」など日常目にするモノを表わす名詞)に共通する特徴である。これらが連体修飾節を構成する命題の中でどのような位置を占めているかには、さまざまな場合がある(主格、目的格などの格の他、連体修飾などの場合もある)。

(22) a 自宅に届いたもの(主格(ガ))

b 昨日買ったもの(目的格(ヲ))

c 塩をひとつまみ加えたもの(与格(ニ))

d クギを打つもの(道具格(デ))

c 皮を食べるもの(連体修飾(ノ))

### β 名詞述語文の構成

第二の過程として、同一名詞連体をした形式名詞モノが名詞述語文の述語名詞として用いられるという手順を踏む。このことによつて、形態上は文末にモノダというつながりができるが、これは「太郎は学生だ」と同じく、「カナヅチは「クギを打つもの」だ」という統語構造であり、連体修飾節+モノで名詞句を構成し、それに断定助動詞ダが承接して述語となっている。

(23) a この荷物は自宅に届いたものだ。

b この本は昨日買ったものだ。

c このお汁粉は塩をひとつまみ加えたものだ。

d カナヅチはクギを打つものだ。

e 北京ダックは皮を食べるものだ。

ちなみに、名詞述語文には、指定文と指定文という大きな二つの類型がある。たとえば(24) a が指定文であり、(24) b・c は指定文である(24) d のような文は、原則的に不自然である)。

(24) a 太郎は学生だ。

b 太郎が学生だ。

c 学生は太郎だ。

d \*学生が太郎だ。

というのたとえば、(25) a のような質問には(24) a のような指定文で答え、(25) b のような質問には(24) b・c のような指定文で答えることになる。

(25) a 太郎は何(どういう人物)ですか。

b (ここにいる人たちのうち) 学生は誰ですか。

すなわち、指定文とは、ある対象を提示して、その属性・関係・同一物などを示すことによつて何らかの特徴付けをする文のことである。それに対して指定文とは、何らかの特徴を提示して、ある範囲の中から、その特徴を持つ対象を選び出す文のことである。ここで、この段階のモノダ文はそのうちのどちらかというと、指定文に属すると考えられる。すなわち、「連体修飾節+モノ」+ダで主語名詞の「特徴付け」(広い意味で)を行っていると考えられる。

### γ 異分析

さて、このようにして形成されたモノダ文は、述語が形容詞や形容動詞でなく、連体修飾節を受けたモノという名詞によつて構成された名詞述語であるために、連体修飾節を受けたモノは主語名詞と同一物を指示していることになる。したがって、(26) a・e のようにモノの位置に主語名詞を代入することができる。

(26) a 自宅に届いた荷物

b 昨日買った本

c 塩をひとつまみ加えたお汁粉

d クギを打つカナヅチ

e 皮を食べる北京ダック

また、同格連体である連体修飾節の中でモノが位置する箇所主語名詞を代入することもできる（このあたりの操作は、『三上章が『象は鼻が長い』で行ったものと同じである）。

(27) a この荷物が自宅に届いた。

b この本を昨日買った。

c このお汁粉に塩をひとつまみ加えた。

d カナヅチでクギを打つ。

e 北京ダックの皮を食べる。

このように、名詞述語文としてのモノダ文、Aハ「Pモノ」ダにおいて、主語Aに対して、述語「Pモノ」ダ全体ではなく、連体修飾節Pだけと主述関係を構成している、すなわち「AハP」モノダと了解することも充分に可能である。

ただし、ここでは可能性として論じているのであって、実際に、すべての文に対してそのように解釈できると論じているわけではない。

(28) a 「この荷物は自宅に届いた」ものだ。

b 「この本は昨日買った」ものだ。

c 「このお汁粉は塩をひとつまみ加えた」ものだ。

d 「カナヅチはクギを打つ」ものだ。

e 「北京ダックは皮を食べる」ものだ。

このように、文の形態は同じであっても、統語的な構造を異なつたものと了解することを「異分析」と呼ぶことにしたい。

歴史的に見渡してみても、異分析によって生じた文法表現は決して珍しいものではない。たとえば、連体格助詞ガ（あるいはノ）が、主格格助詞に拡張する経緯として、橋本進吉は以下のような議論を展開している。すなわち、まずは名詞1＋ガで構成される連体修飾句が、名詞2を修飾する構造が存在した（29）a「私の妻」。名詞2はさらに用言による連体修飾句を伴うこともありうる（29）b「私のかわいい妻」。しかしこの同じ文形態が、名詞1を主格として本来名詞2の連体修飾をしていた用言を述語とする文構造であると了解されるようになって（29）c「私がかわいい（と思う）妻」、主格名詞が成立したと論じられる。

(29) a 吾が妻

b 吾が愛しき妻

c 吾が愛しき妻

これと同様の展開が、モノダ文の成立にも関わっている

と考えることは決して不自然ではないだろう。なおこうして一旦「助動詞的」モノダが成立してしまえば、命題部分は必ずしもAハPのような題述文である必要もなくなる。「AガP」モノダもしくは単に「P」モノダなどの形も生まれたと考えられる。

#### δ文末辞化

ここで「文末辞」と呼んでいるが、これは先行研究でしばしば「助動詞」と呼んでいるものと同じものを指す。ただ筆者は「助動詞」と呼ぶことに躊躇を覚えるので、消極的に「文末辞」と呼ぶことにしたい。実は、この文末辞化は、γの異分析とほとんど同時に見出される操作である。

すなわち、異分析によつて、主語＋〔述語節(連体修飾節)＋モノナダ〕という構造が、「主語＋述語(節)」＋モノナダというように異なった構造化が行われるようになると、モノナダが遊離して、命題(主語＋述語)に付加するように了解されるようになる。そうするとモノナダというつながりが独立した単位として、何らかの機能を担っていると了解されるようになるわけである。

理論的には、以上のような段階を経てモノナダ文が成立したと考えられるわけであるが、次に、このような段階を経ることによつて、どのようにしてモノナダ文のさまざまな用

法が派生していったのかについて考えていきたい。

意味論的説明においては、「見たり触ったりすることができ、時間的にもあまり変化しない」といった、モノの「典型的」な意味から「一般性」といった意味論的特徴を抽出し、モノナダ文の諸用法への派生を説明しようとした。統語論的説明では、そのようなモノの意味による説明は行わない。モノナダ文の統語論的な成立過程の中に、諸用法への派生の契機を見出さなければならぬ。

ここで注目したいのが、②名詞述語文の構成という段階である。ここで構成される名詞述語文は、指定文であり、指定文は主語名詞に対して述語名詞が「特徴付け」を行うものであった。ある対象は、さまざまな観点から「特徴付ける」ことができる。その対象が持つ一般的な属性によつて「特徴付ける」こともできるし、過去におけるその対象との関わりによつて「特徴付ける」こともできるし、またその対象から受けた印象や感情によつて「特徴付ける」こともできるだろう。以下各用法ごとに考察を加えていきたい。

まず第一に、「一般論」用法は、その対象が持つ一般的な属性によつて「特徴付ける」ものである。ある時あるところで起こった一回的な出来事ではなく、その対象が持つ本質的な性質、その対象に反復的に起こる事態といった「汎称」的な名詞述語文から派生したものが、「一般論」用法で

あると考えられる。(30) a、cは名詞述語文ではあるが、(一般論)用法のモノダ文と連続的である。

(30) a 僕は君を愛する。しかし愛情によって君の自由を束縛してはいけないと思う。愛は愛、自由は自由。その二つをぐちゃにしているといけない。過去の、殊に封建的な時代の愛情は、互いに相手を束縛するものだった。

石川達三『青春の蹉跌』142

b 議論の根柢にある思想は、青春の明るい希望にみちたものではなくて、むしろ絶望的なものだった。

石川達三『青春の蹉跌』4

c 「悪と罪とは違うのかい?」「違う、と思う。善悪の概念は人間が作ったものだ。人間が勝手に作った道德の言葉だ」  
太宰治『人間失格』208

このように、モノダ文になると主語は総称名詞でなければならぬが、(一般論)用法につながる名詞述語文が必ず総称名詞の主語をとらなければならないわけではない。

(31) a この器具はワインの栓を開けるものだ。

b 花子のケータイはミッフィのストラップが付いたものだ。

それがモノダ文になると、総称名詞の主語でなければならないところには、あるいはモノの(一般性)といった特徴が関わっているのかもしれない。

第二に、(当為)用法は、多くの先行研究の指摘通り、(一

般論)用法からの語用論的拡張として位置付けるべきである。ちなみに、J・サールの『言語行為』において、何らかの発語内行為 (illocutionary act) は、命題内容条件 (propositional content condition)、事前条件 (preparatory condition)、誠実性条件 (sincerity condition)、本質条件 (essential condition) という四つの条件の組み合わせによって定義できると論じている。その中で「依頼 (Request)」は以下のように記述される (言うまでもないことだが、Sは話し手 (speaker)、Hは聞き手 (hearer)、Aは行為 (action) を表わす)。

命題内容規則: Hによる将来の行為A

事前規則:

1 HはAをする能力を持つ。SはHがAをする能力を持つと信じる。

2 SとHの両者にとって、通常の事態の進行においてHがAをすることは自明ではない。

誠実性規則:

本質規則:

Sは、HがAをすることを欲する。  
HにAをさせる試みとして見なす。

これらの条件は、現在の観点から振り返ると、(依頼)を成立させるための語用論的な条件であると考えることができ、モノダ文において(当為)用法が成り立つ条件もほぼこれがそのままあてはまる。ということはモノダ文の(当為)用法も、(一般論)用法からの語用論的な派生であ

ると考えることは妥当であると考えられる。

第三に、〈回想〉用法は話し手の過去の経験によって〈特徴付け〉ものであると考えられる。すなわち、過去におけるある時ある所での出来事に関わった、ということによって主語を特徴付けるものである。このような〈特徴付け〉を行っている名詞述語文には(32) a、cのようなものがある。

(32) a 「なに、くれにすっかり売はらったあとで、こいつが一つ、どこからか出て来た。おれのうちのじいさんが御当代のおじいさんにもらったものだ。」

石川淳「処女懐胎」 437

b いつか大牟呂さんが、この石柱は何代か前の先祖が建てたものだと言っていた。高さ一丈あまりで、頂上から二尺五寸くらい下って「夢」という一字が刻んである。

井伏鱒二『黒い雨』 222

c それはタラバ蟹とコンビーフとアスパラガスの確話で、当時すでに珍しくなっていたものだし、殊にあとの二つは敵国アメリカの製品であった。アスパラガスは太く柔かく舌先でとろりと溶け、蟹もコンビーフもそれぞれ徹吉の舌を充足させた。

北杜夫『榆家の人々』 1567

ただ、まだこれらは名詞述語文であり、過去の一回的な出来事そのものを述べていると言つてよいものである。し

かるに、モノダ文として成立するに際しては、当該対象の〈特徴付け〉に役立たなければならぬということから、単に過去の出来事に関わったというだけではなく、それが反復されることで、話し手に当該対象を〈特徴付ける〉ことができたり、一回的であっても、話し手に強い印象を与えることによって当該対象を〈特徴付ける〉ことができたであろう。

しかし、主語名詞を過去の出来事によって〈特徴付ける〉名詞述語文と、モノダ文の〈回想〉用法の間には大きな断絶がある。すなわち前者には〈回想〉の意味合いはなく、後者には主語名詞の〈特徴付け〉という意味合いはない。

確かに、〈回想〉はひとまとまりの事態と考えられるので、命題に文末辞モノダが下接したモノダ文でしか表現できず、主語名詞の〈特徴付け〉は名詞述語文でしか表現できないだろう。たとえば、(33) a、b はどちらの文構造にとらえるかによって、クラインの壺のように、〈特徴付け〉を表わす名詞述語文とも、〈回想〉を表わすモノダ文とも解釈できる。

(33) a この時計は「これまでに何度も修理に出したものだ。」

b 「この時計はこれまでに何度も修理に出したものだ。」

第四に、〈感慨〉用法は、話し手に強い印象を与えた出来事、あるいはそれに対する評価やそれから受けた感慨によって〈特徴付け〉るものであると考えられる。話し手に強い印象を与えた事実、あるいはその事実とそれによつても

たらされた話し手の感慨、さらには事実背景化して話し手の感慨のみなど、さまざまな場合が見出される。この場合は、言うまでもなく、話し手の認識が表に出る結果となる。

また、話し手（登場人物）の評価や感慨によって（特徴付け）られている名詞述語文も(34) a c のように少なからず見出すことができる。そして話し手の評価や感慨によって（特徴付ける）名詞述語文と（感慨）用法のモノダ文とは連続したものと見ることができ。すなわち、ある対象を何らかの感慨を受けたものとして（特徴付ける）ことと、何らかの感慨を受けた事態をそのまま述べることとの間には、明確な境界を引くことはできないように思われる。

(34) a 吾一はこの評を、あまり、ありがたく思わなかった。当選させてくれるのなら、もう少しほめてくれてもいいと思った。しかし、なんにしても、二円という賞金は彼にとつては、じつにありがたいものだ。

山本有三『路傍の石』 628

b 疲れて眠たくなっていたので、休んで行きたい気持ちなり。勝手口を開けてみると、錆びた鍮詰のかんからがゴロゴロ散らかっていて、座敷の畳が泥で汚れていた。昼間の空家は淋しいものだ。

林芙美子『放浪記』 32

c 「バナナの葉の腰巻は涼しくていいものだぞ。きみ

たちもやってみろ」と負け惜しみをいいました。

竹山道夫『ビルマの竖琴』 31

ただし、この（感慨）用法は混在的なカテゴリーであると思われる。これまで、何らかの対象を話し手が下した評価、話し手が受けた感慨によって（特徴付ける）用例を検討してきたが、話し手の評価や感慨は表に表わさず、事実のみを提示して評価や感慨は含意させるとどめる用例も見出される。両者を厳密に区別することは難しいが、第2・1節に挙げた例の中からそれにあたりそうなものを再掲すれば、(35) a e のようなものになるだろうか。

(35) a そんな風に思い出に導かれるままに、村をそんな遠くの方まで知らず識らず歩いて来てしまった私は、今更のように自分も健康になったものだなあ、と思った。

堀辰雄『美しい村』 32

b 世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだ、私は、その時つくづくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいじらしく、哀れに思えてなりませんでした。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 34

c そう云う声がでんでんに人々の口から喚かれた。それにしても船はひどく流されていたものだ。雷電峠から五里も離れた瀬にいたものが、何時の間にかこんな処に來ているのだ。有島武郎『生れ出づる悩み』 28

d 私たちの寺には蚊帳の数が少なかった。よく感染し



なかつたものだと思ふが、母と私は結核の父と一つ蚊帳に寝、それに更に倉井が加わつた。

三島由紀夫『金閣寺』114

e 各人が種々様々な思考および行動をてんでにしてい  
て、よくアメリカというものが崩壊もせずに、国家と  
してのまとまりを保っているものだとしばは感心さ  
せられたものだ。アメリカ研究家とかアメリカ人はそ  
れをこう説明することが多い。

藤原正彦『若き数学者のアメリカ』533

このように、単に事実を提示するだけの場合は、あえて  
わざわざ当該の事実を選び出して提示するのか、その理由  
の付度が聞き手に求められることになるのではないだろう  
か。ある未実現の事態が提示されれば、多くの場合〈命令〉  
〈当為〉などの意味合いが生ずるように、実現された事実、  
一般的な真実が提示されれば、多くの場合は〈感慨〉〈詠嘆〉  
などの意味合いが生ずると考えられる。このように、先に  
〈当為〉用法が〈一般論〉用法からの語用論的派生である  
のを見たのと同様に、〈感慨〉用法の一部も、命題に示され  
た実現された事実、一般的な真実に誘発されて語用論的に  
発生したと考えることができる。殊に b の「世の中には  
随分無責任な親や兄弟もある」という内容は、それだけを  
取り出せば〈一般論〉用法とも了解できるものであり、〈一  
般論〉用法から派生する〈感慨〉用法もありうるものと思

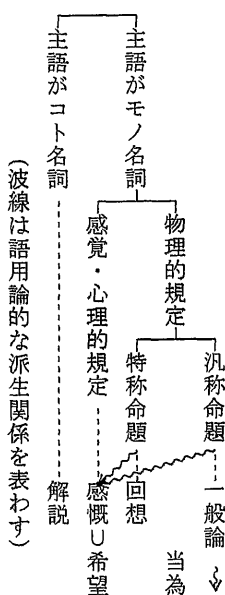
われる。

第五に、〈解説〉用法は、〈特徴付け〉られるべき主語名  
詞がコト名詞である場合であると考えられる。第1節でも  
論じたように、日本語のモノとコトとは、意味論的にその  
違いを論じようとすれば、おびただしい例外を容認しなけ  
ればならない。しかし、モノとはある事態に関わる要素の  
意であり、コトとはその事態全体の意である、というよう  
に原・統語論的に了解すれば、それほど不明確な概念では  
なくなる。そしてあるコトは、事態の中に繰り込まれるこ  
とで、その事態の要素としても働くことがある。それが具  
体的に「……こと」とコトが用いられることもあれば、「事態、  
状況、問題、事件」などなど、事態名詞で表わされること  
もある。このような場合は、かえってAハBダという形で、  
AについてBで説明を行うという、名詞述語文の本来の機  
能がそのまま反映され、それが〈解説〉と呼ばれる用法と  
なったものと思われる。第2・1節に挙げた例は、コト的  
な主語名詞がある名詞述語文の例か、それを無理なく補う  
ことのできる例であつた。

以上の議論をまとめると、モノダ文の諸用法は全体とし  
て以下のように表示できる。ここにはモノないしモノダの  
意味的な基準は見出されない。まず、主語がモノ名詞かコ  
ト名詞かによつて二分されるが、コト名詞の場合が〈解説〉  
用法となる。あとは述語付けのあり方に関わる基準であり、

次に、客観的な事実によって述語付ける物理的規定をするか、話し手の当該の対象に対する評価やそこから受けた感慨によって述語付けする感覚・心理的規定かによって二分されるが、後者の場合が〈感慨〉および〈希望〉用法となる。ここで、〈希望〉用法は、タイモノダ（テホシイモノダ・テモライタイモノダなども含む）など、形態的にも目に付きやすいものであり、ある程度の割合で現われるので一類として立てたくなるが、何らかのきつかけによって引き起こされた情意の表現に変わりはなく、〈感慨〉用法の下位類であると考えられる。そもそも〈希望〉という意味は、モノダに前接するタイ（テホシイ・テモライタイ）によってもたらされるものである。さらに、物理的規定をするものに関して、特に時間や場所が特定されない汎称命題が用いられれば、その対象の一般的な特徴を表わす（一般論）用法となり、時間や場所が特定されるで起こった事実を表わす特称命題が用いられれば、過去の出来事を思い返す（回想）用法となると考えられる。〈回想〉用法は、過去に繰り返して起こった事態を表わすことが多い。特称事態には、現在眼前に見出される事態も、過去に一回的に生じた事態も含まれるが、文法化という過程は、すべての可能性が実現されるものではなく、多くの可能性のうち一部が実現されるものである。何らかの対象を（特徴付ける）場合には、過去に何度も繰り返されたために、まさにその対象

の特徴と了解されるものが、文法化されるのに最もふさわしかった、というような事情が考えられる。名詞述語文の段階にとどまっているモノダ文であれば、現在の一回的事実を述語名詞にとることに、何の不自然さもない。また、〈當為〉用法は（一般論）用法から語用論的に派生し、〈感慨〉用法の一部も汎称命題や特称命題に誘発されて語用論的に派生するものと考えられる。



図表五

ここまで、モノダ文の諸用法の広がりと、その派生関係を、意味論的に説明するのではなく、統語論的に説明すべきことを論じてきた。そして諸用法のある部分は、名詞述語文の働きである〈特徴付け〉の仕方の違いとして説明でき（一般論）〈回想〉〈感慨〉（の一部）〈希望〉〈解説〉用法、また別の部分は、語用論的な派生として説明できる（〈當為〉〈感慨〉（の一部）用法）ことを論じた。

### 3 コトダ文

コトダ文に関しても、まず従来の記述的研究をもとに、諸用法およびその特徴を示し、次にその派生の仕方を理論的に究明したい。

#### 3・1 コトダ文の諸用法

コトダ文はおよそ以下の二つの用法に分けられる。

①〈当為〉用法：聞き手あるいは話し手自身に対して、もしくは無人称的に、こうすべきであると述べる場合に用いられる。ただし、モノダ文の〈当為〉用法とは異なり、一般論を経由せずに、直接その場ですべきことを述べる。すなわち、主語も総称名詞を用いずに、直接二人称あるいは一人称を用いる。

(36) a おれは学校騒動には加担しない。現実を大事にし、自分の立場を大事にしなくてはならない。これはエゴイズムではない。社会人としての当然の義務でもある。とにかく今年のうちに司法試験に合格することだ。

b 「俺に弁解する必要はない。起きられるようになった」  
石川達三『青春の墜落』135

たら、この当主夫妻にせいぜい弁解することだな」  
鮎太は、少し邪険にいった。

井上靖『あすなる物語』284

c 「若いというのはいいいものだ。若者の特権を有効に活かすことだな。一歩あやまると取りかえしがつかない道に踏みこんでしまいが、有効に活かしたら、道はいくらでもひらけてくる。しかし、行助は、旅行が好きだな。この春もどこかへ行つただろう」

立原正秋『冬の旅』674

d 「台湾へ行ったら、すぐ伊沢長官を訪問し、よく説明することだ。誤解さえとけば、すぐにも片づくのではないか」  
星新一『人民は弱し官吏は強し』350

e 「コンスタンティノープルへ行ったら、よく見てくることがだね。栄光ある東ローマ帝国の首都が、今ではいかに衰れに落ちぶれているかを。」  
塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』57

また、モノダ文の〈当為〉用法と同じく、コトダ文の〈当為〉用法にもその否定形としてコトハナイ(コトデハナイではない)があり、必要がないことを表わす。モノデハナイがしないことを求める(○を義務を表わす論理詞だとすると、○○で表現であるのに対して、コトハナイはする必要がないことを表わす(〇〇p)表現である。

(37) a 「あなたはぜひぶん疲れているようだわ。つづきは

明日にした方がいんじゃないかしら？ 無理するこ  
とはないのよ。古い夢はいくらでも待っていてくれる  
もの」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 797

b 「いいのよ、浜さん、ちつとも遠慮することはない  
のよ、冬だと布団が足りないけれど、今なら四人ぐら  
いどうにかなるわ。それに明日は日曜だから、譲治さ  
んも内にいるし、いくら寝坊してもいいことよ」

谷崎潤一郎『痴人の愛』 280

c 気さくなおばあさんは、彼の前でおまんじゅうを割  
って、うまそうに口へ持っていた。吾一のからつば  
な胃ぶくろは、帯の下で、はげしく波を打っていた。  
——何も遠慮することはない。くれると言うものは、  
もらったつていいではないか。

山本有三『路傍の石』 497

d 「まあ、ええわ、急ぐことはない」春さんもそんな  
風に言った。

井上靖『あすなろ物語』 219

e 「おい、行こうか」と私はいった。「あは、あは、何  
も行くことはない。台湾から飛行機が迎えに来るはず  
だ。オートジャイロで、ほら、ここへ着陸するはずだ」

大岡昇平『野火』 248

② 〈感慨〉用法… 話し手がある出来事に際会して、何らか

の感慨を抱いたことを表わす表現。多く、話し手の抱いた  
評価や情意に直接コトダが下接するが、稀に(38) g・hのよ  
うに、感慨を誘発した出来事にコトダが下接することもある。

(38) a 「ひどいなあ、実際、何ということだ」と、その紙  
ぎれをズボンのポケットに入れた。

b ——何ともはや怖しいことだ。私はもう義弟も義弟  
の甥も、黒焦げになつてしまつたと思つてゐる。

井伏鱒二『黒い雨』 456

c 「いや、よそう。もういちど読んでも、別のことが  
書いてあるわけではない。隙がない、と言つたらおか  
しいが、とにかくそんな手紙だつた。返事はやはり私  
が書こう。……しかし、さびしいことだ」

立原正秋『冬の旅』 940

d 「とんでもないことだ」星はどなり、手で机の上を  
たたいた。

星新一『人民は弱し官吏は強し』 150

e 「大体、相伴役しょうはんやくの方々が無作法ですぞ。儒者じゅうしやとして  
これほど有名な私を知らずして、よくも朝廷に仕えて  
いられることだ。おろかものめが」

田辺聖子『新源氏物語』 1171

f それにつけても、紫の上こそ何という好もしい女性  
であろう。われながらよくもああ美事みことな女性に育てた

ことだ、などと源氏は思う。

田辺聖子『新源氏物語』

1914

### 3・2 コトダ文の諸用法の関係

コトダ文もモノダ文に倣って成立の経緯をたどれば以下のような段階をたどるものと思われる。

#### α 連体節（同格連体）の構成

コトダ文が成立するためには、まずコトに対して命題ないし用言が連体修飾をする必要があるが、コトの場合、同格連体が典型的な連体修飾であった。コトダ文も、同格連体がもとになると考えられる。

#### β 名詞述語文の構成

何らかの命題あるいは用言は、コトに連体修飾することによって名詞化される。さらに名詞述語文 A ハ B ダの名詞部分に、コトによって命題あるいは述語が名詞化されたものを代入して、「Pコト」ハ「Qコト」ダという名詞述語文を作れば、その述語部分に「Qコト」ダというように、コト+ダという形式が構成される。ちなみに、コトダ文について論じられる場合、文末辞化したコトダばかりが取り上げられることが多いが、実際のコトダの用例は半数以上が

名詞述語文の段階のものである。

#### γ 述語部分の独立

コトダの文は、「Pコト」ハ「Qコト」ダのように主述が完備している限りは、名詞述語文に留まることになる。このうち述語部分が独立してQコトダという形になることによって、はじめて〈当為〉ないし〈感慨〉といった独特の意味合いを表わすことになる。

(39) a 私が最近心掛けていることは、お年寄りには親切にすることだ。

b お年寄りには親切にすることだ。

モノダ文の場合は、ここに異分析という文構造の変換という複雑な操作が挟まったが、コトダ文の場合はこのように、単に名詞述語文の述語部分が独立するにとどまる。

#### δ 文末辞化

名詞述語文においては、コト+ダは、Q という命題あるいは用言をコトによって名詞化し、さらにダによって再述語化するという統語的に実質的な機能を担っていたが、γの述語部分の独立という過程は、このコトによる名詞化およびダによる再述語化という統語的な機能を無効化する。すなわち、Qコトダという文構造は、Q という命題に、単に文末辞としてのコトダが接続したものであることになる。

言い換えれば、文としてはQという命題構造だけで充分で、コトダはいわばそれに付け足された形式に過ぎないことになる。このように統語的な機能を取り払われた形式は、それまででない新たな意味・機能を担うことになる。

以上のように、まずコトダ文の成立過程を理論的にたどって見たわけだが、実際に文末がコトダとなっている用例を通観してみると、むしろ大多数のものが名詞述語文の段階のものである。そのうちある種のものから、コトダ文が派生したと思われる。そこで、まず文末がコトダとなっている名詞述語文ありさまを見渡しておきたい。名詞述語文は、二つの命題ないし用言を主述関係として結び付けたものであるが、この二つの命題ないし用言の関係には、いくつかの類型が見出される。

i 認識表現<sup>ii</sup> 認識述語と認識内容との関係が見出される。

認識述語と認識内容という関係は、通常は引用表現を用いて（認識述語を「思う」で代表させれば）、「私はQと想った」のように表わされるが、これが認識述語と認識内容とに分離されて、「私が（その時）思ったことは、Qということだ」のように表わされることがある。

(40) a しかし暇をつぶすにはもってこいだだったので、私は端から順番にそのポスターを眺めていった。それで、

その十五枚のポスターを眺めて、私にわかったことは、あらゆる酒の中ではウイスキーのオン・ザ・ロックが視覚的にいちばん美しいということだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』431

b ただひとつわかつていることは私がなりゆき上とはいえ『組織』<sup>レジスタム</sup>を裏切ってしまったということだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』540

c 私がその音についていちばんおぞましく思ったことは、それが我々二人を拒否するというよりは手招きしているように感じられたことだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』818

d しかし、帰ってこない母おやのことを、いくらなげいたところで、しかたがなかった。そういう時、まさきに、彼のあたまに浮かんでくるのは、稲葉屋のおじさんのことだった。次野先生の姿だった。

山本有三『路傍の石』463

e 副院長があぶないと言っているのは、安坂宏一と天野敏雄が千葉の少年院いらいの仲間であることからして、二人とも帰るべきところに帰らず、悪い仲間のもとに走ってしまうのではないだろうか、ということだった。

立原正秋『冬の旅』323

ii 評価表現<sup>iii</sup> ある事態内容とそれに対する評価述語（およ

そ形容詞・形容動詞)とは、コトダを用いずにPノ／コトハAと言ってもよいところを、名詞述語文を用いてPノ／コトハAコトダと述べたものである。

(41) a ジュリアン・ソレルの場合、その欠点は十五歳までに決定されてしまったようで、その事実も私の同情心をあおった。十五歳にしてすべての人生の要因が固定されてしまうというのは、他人の目から見ても非常に気の毒なことだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』550

b 私たちはその小さな橋の上で、何の意味もなしに、水のおもてを眺めていた。戦争中の思い出のほうぼうに、こういう短い無意味な時間が、鮮明な印象でこっている。何もしていなかった放心の短い時間が、時たま雲間にのぞかれる青空のように、ほうぼうに残っている。そういう時間が、まるで痛切な快楽の記憶のように鮮やかなのは、ふしぎなことだ。

三島由紀夫『金閣寺』104

c 「へえ——学校にも居られなくなる、社会からも放逐される、と言えば君、非常なことだ。それではまるで死刑を宣告されるも同じだ」

島崎藤村『破戒』408

d 自分は恋する女の為に卑しい真似はしたくない。自分を益々立派にしたいと思うだけで、自分の妻になる人

間に自分をあざむくことは凡そ恥かしいことだ。

武者小路実篤『友情』94

e 寺坂との結婚は、学校で歴史の時間に習った昔の人の政略結婚とおなじことだ、と登美子は思った。

石川達三『青春の蹉跌』70

iii 同格表現: 一見まったく異なっている二つの事態を、同じものであると結び付けて、「Pコト」ハ「Qコト」ダという名詞述語文で表現したもの。

(42) a 「変ね」と娘は言った。「首抜きが作動しているということは、研究室が破壊されていないということだわ。」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』706

b 「黙れ、きさまは我輩に、七十二人待てつと云うか。おれを誰だと思える。北守將軍ソンバーユーだ。九万人もの兵隊を、町の広場に待たせてある。おれが一人を待つことは七万二千の兵隊が、向うの方で待つことだ。すぐ見ないならけちらすぞ。」將軍はもう鞭をあげ

馬はいきねあがり、病人たちは泣きだした。

宮沢賢治『北守將軍と三人兄弟の医者』264

iv 解説表現: 主語は何らかの解説を要求する名詞であり、述語はそれに対する解説内容となっている、Nハ「Qコト」

ダという形の名詞述語文である。解説を要求する名詞と解説内容という関係は、しばしばQトイウンという形に置き換えることができる(たとえば(43)aに對して「それがみんなピンクであるという根本的な問題」)。

(43) a 根本的な問題は私の入れた洗濯ものの量が圧倒的に少なすぎるのと、それが全部女ものの衣類と下着であることと、それがみんなピンクであることだった。いくらなんでも目立ちすぎるのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1227  
b 私の台所との違いはガス・オーヴンがなく、そのかわりに電子レンジがあることだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1372  
c しかし今は仕方がないと、彼は思っていた。必要なことは、なるべく早く婚約を正式なものにすることだ。要するに江藤自身が彼女の良人としてふさわしい社会的条件を身につけることだった。

石川達三『青春の蹉跎』206  
d 松島事件とは、大正十五年に、大阪の松島遊廓の移転をめぐるおきた疑獄事件のことだ。

星新一『人民は弱し官吏は強し』416  
e 「俺はそんなときどうしても冷静になれない。冷静というものは無感動じゃなくて、俺にとっては感動だ。苦痛だ。しかし俺の生きる道は、その冷静で自分の肉

体や自分の生活が減じてゆくを見ていることだ」

梶井基次郎「冬の日」70

これでコトダで結ぶ名詞述語文の類型をすべて尽くしたというつもりはないが、コトダ文への派生を考える上では、これくらいの用法を挙げれば足りるものと思われる。結論から言えば、コトダ文の(当為)用法は認識表現の述語部分、(感慨)用法は評価表現の述語部分から派生したものであるまいだろうか。すなわち(当為)の内容はそうすべきであると話し手の心内で思い浮かべられたものであり、現実の出来事ではない。これは認識表現の述語となる命題の特徴である。他方(感慨)の内容は現実の出来事、ないし現実の出来事から誘発された話し手の評価・情意である。これは評価表現の述語となる命題の特徴である。それが述語だけで独立した表現となった際に、それぞれ(当為)、「感慨」がモノダが担う意味機能として定着したと考えることはできないだろうか。

しかしなぜ他の意味機能ではなく、まさに(当為)「感慨」という意味機能を担うことになったのだろうか。言うまでもなく、コトは単に何らかの事態を意味するに過ぎず、本来モダリティ的には何の意味機能も担っていない。そのようになまつさらな命題が提示された場合、言語使用者はそこに何らかのモダリティ的な意味機能を読み込もうとする。



その際、命題が未実現の事態であれば、そのことの実現を聞き手（あるいは話し手自身）に求める表現であると了解されるのではないだろうか。ウ（古典語のム・ベシ）の〈勧誘〉〈当為〉用法、言い切り断定文、ノダ文の〈命令〉〈意志〉用法などはそのような経緯で成立した用法であると考えられる。また、命題が既実現の事態であれば、そのことに對して話し手がある種の感慨を抱いたことを表わす表現であると了解されるのではないだろうか。言い切り断定文にもノダ文にもこのようにして〈詠嘆〉〈感慨〉を表わす用法を見出すことができる。

このような経緯をたどった用法の成立は、語用論的な派生であると考えられる。ちなみに、モノダ文は六つの用法に分けられ、そのうち〈当為〉用法、〈感慨〉用法が語用論的な派生であると分析した。それに対して、コトダ文は二つの用法が挙げられるに過ぎず、それが〈当為〉用法と〈感慨〉用法であった。語用論的な働きは、語の意味とは関わりなく、ある条件が揃えば同じように受けるものである。ここでは、モダリティ的な意味機能が希薄であるという条件が共通するモノダ文、コトダ文に働いて、どちらにも〈当為〉用法と〈感慨〉用法とが生じたものと考えることができ

#### 4 ワケダ文

##### 4・1 ワケダ文の諸用法

ワケダ文に関しても、モノダ文・コトダ文に倣って、従来の記述的研究によって示されている諸用法およびその特徴を挙げることから始めたい。

①〈結論〉用法 論理的な因果関係をたどって、結論を述べる場合に用いられる。その際、(44) a のように現実に起こった出来事の因果関係に用いられることもあるし、(44) b のように話し手（作者）の心内で働く推論の因果関係に用いられることもある。実際の用例を見渡すと、大方のものがここに入る。

(44) a 若い女は田舎にいても都会にいても徴用で軍需工場の女工にされ、ハンマーを振りあげたり砲弾を削ったりする労働をさせられる。それで僕が古市工場に勤めているのを幸いに、ずるく立ちまわって矢須子を工場長の伝達係にするように工作したわけだ。

b 僕は工務部に連絡して、板を幅三寸、長さ六尺ほどに削らせ、この避難場所を記入して各自の家の焼跡に立てさせることにした。一人に一枚ずつ入用である

井伏鱒二『黒い雨』198

として十五六枚あればいいわけだが、叔父さんや叔母さんの家の焼跡にも立てたいと云つて、追加のぶんを三枚も自分で削つた中年の職員が一人いた。

井伏鱒二『黒い雨』280

c 「もう一度やつてみなさい。」「へえ。」ひたいを板のまにこすりつけているのだから、それ以上お辞儀のしようはないわけだが、吾一は首を少しあげて、また丁寧の下におろした。

山本有三『路傍の石』318

d 三学期の試験で、鮎太は三番になった。二番だったのが三番になって、一番下がったわけだが、これは東京の府立四中から袴田という生徒が転校して来たためであつた。

井上靖『あすなる物語』109

e 成城の家に夫婦で訪ねてきたとき、整つた目鼻立ちの子だと思つたが、いま澄江の眼前にいる厚子は、女の目から見ても美しかった。安より二つとしようえだと言つていたから、二十三歳になっているわけだ……そして澄江はふつと箸をとめ、もしかしたら……と思つた。行助はこの厚子に好意をよせているのではないだろうか……。

立原正昭『冬の旅』789

f 小僧も満足し、自分も満足していい筈だ。人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然、或喜びを感じていいわけだ。ところが、どうだろう、この変に淋しい、いやな気持は。

志賀直哉『小僧の神様』218

②〈言い換え〉用法…ある事態を見方を変えて別の観点から見るとどういふことになるか、言い換えたもの。

(45) a 「あの連中はね、始めから今日の大学制度というものを認めていないんだよ。資本主義機構の一つだと見ているわけだ。卒業した者はみな資本主義社会に奉仕するんだから、大学そのものを否定するという考え方だよ。それはそれで筋が通っているじゃないか」

石川達三『青春の蹉跌』126

b 大正七年の十一月、長くつづいていた大戦も、ドイツの降伏によつてやつと終りをつげた。血にまみれたヨーロッパの地上に休戦ラッパが鳴りひびいたわけだが、日本においては特に感激もなかった。

星新一『人民は弱し官吏は強し』162

c 少年がクリストであるかどうか判明しないが、イエスだということはまずうごかない目星だろう。市場のものどもはいつたいにあまりおしやべりをしないようだが、少年はとくに一言も口をきかなかつた。按ずるに、行為がことばだというわけだろう。そしてその行為は一つ一つ、たとえばイワシをよこせとか、ムスビを食わせるとか、女の股に抱きつかせるとかいうように、命令のかたちをとっている。

石川淳『焼け跡のイエス』285

③ 〈確言〉用法：対話において、話し手が自分の述べていることに必ずしも根拠がない場合でも、あたかも根拠があるかのように述べる場合に用いられる。しばしば以上のような規定が行われるが、実際にはそれほど押しつけがましい印象を与えないものも少なくなく、話し手は知っているが聞き手は知らないことを述べる、あるいは話し手側（話し手のなわ張り）の情報であることを示す、談話的なマーカーとして働いていると言う方が近いのかもしれない。

(46) a 「…ある程度の年齢——我々は用心深く計算してそれを二十八歳と設定しているわけだが——に達すると人間の意識の総体というものはまず変化しない。…」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』372

b 「それはよくわかる。しかし何かひとつくらい壊してほしくないってものはあるだろう？　いくら安物だといつても、あんたはここで生活しているわけだしさ」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』476

c 「仙さん、いつごろ来た。」「なあに、きょうはちょっと仲間の寄合があつてね、そのくずれさ。じつはこれからお目当のところへ行くというわけだが、喬さんにも紹介しよう。すなわち新発見に係るもので、これがまたいろいろサーヴィスをつくします。」

石川淳「葦手」100

d 「ああ、元氣だ。手紙をよこさないのはひどいじゃないか、と母さんが言っていたよ。ところで、ここから出てからのことだが、行助にはもちろんいままで通りに成城にいてもらうが、修一郎には、これから先も四谷にすんでもらうつもりでいる。今日はそんなことで相談にきたわけだ」

立原正秋『冬の旅』490

e 「去年から、舞台の可能性への試み、という題で、いろいろ実験的な芝居をやっているんだが、たとえば日本の古典演劇の能、歌舞伎、そして落語から講談にいたるまで、これらを新劇の舞台にとりいれ、古典劇と現代劇の交流というのかな、まあ、そんなものを試みているわけだ。この試みはこんどで四回目だが、六月の二十日から三十日まで、赤坂の乃木会館でやる。観にきてくれるかい」

立原正秋『冬の旅』636

④ 〈納得〉用法：話し手がすでに知っていることが、新しく知った他のことから導かれる結論と一致したことにより、なるほどそうだったのかとなるほどそうだったのかと納得する場合に用いられる。この用法は、以上の諸用法とは分類の観点が異なっている。

(47) a 重松は家に帰ってから加藤大岳編纂の「宝暦」という暦を見た。旧暦は立待月の六月十七日、聖護院大根、隠元豆、結球白菜など、人蔘、瓜類の後地に播くに適

した日頃となつてゐる。九月の残暑というものを利用

した農作経験から得た貴重な教えである。なるほど、

これなら鯉の子も育つわけだと思つたが、あと三日で  
新暦では八月六日の広島原爆追憶日、八月九日は長崎  
原爆追憶日となつてゐる。 井伏鱒二『黒い雨』 605

b 「日本の国籍を選んだ」「なるほど、君の意志で選ん  
だわけだ。しかし、それはなぜなんだろう」

沢木耕太郎『一瞬の夏』 553

さて、ワケダ文の諸用法を見渡したわけだが、モノダ文、  
コトダ文の諸用法とは異なり、①から③までの用法は中心  
的な用法から周辺のな用法へというグラデーションによつ  
て並べられている。すなわちワケダ文は因果関係を背景に  
その結果を表わすのが本来の働きであり、〈言い換え〉用法  
も、前に示された根拠があつてはじめて、言い換えた他の  
言い方ができるという意味で、因果関係の拡張と言えない  
わけではない。〈確言〉用法も、実際には何の根拠もないに  
しても、あたかも根拠があるかのような言い方をするとい  
う意味で、さらなる拡張と言うことができる、というわけ  
である。

#### 4・2 ワケダ文の諸用法の検討

モノダ文、コトダ文は、それらが抱える諸用法は、その  
意味機能同士があまりにかけ離れてゐたために、それらが  
どうして同一の形式を持つのかが大きな問題であつた。し  
かるに、前節で見たように、ワケダ文の場合は、諸用法同  
士の意味的な関わりはある意味では最初から自明のもので  
ある。

これまでモノダ文、コトダ文に関しては、統語論的に成  
立の段階をたどり、その過程の中に諸用法への派生の契機  
を見出すことができた。しかるに、ワケダ文については、  
それらと同じ統語論的な成立をしたのが、極めて怪しい。  
確かにα連体句（付加連体）の構成という最初の段階は経  
ているだろうが、β名詞述語文の構成という第二段階が存  
在したと考えるべきか、疑問である。というのもワケダを  
文末とする名詞述語文、たとえば「漏電が火事が起こつた  
わけだ」のような表現は不自然であるし、用例も見出しが  
たい（山口（二〇〇五・三一一・五）は名詞述語文出自  
だとするが、挙げてある例は〈確言〉用法のものであるな  
ど、周辺のな用例と言わざるをえない。もし名詞述語文出  
自であるとするならば、典型的な〈結論〉用法に名詞述語  
文が見出されるはずである）。むしろそのような段階は経ず  
に、一気にβ文末辞化が起こつてワケダ文が成立したと考

える方が妥当であろう。

ワケダ文の成立に関してはまた別に検討を加える必要があるが、ここではワケダ文の機能の方に議論を向けることにしたい。ワケダ文はモノダ文、コトダ文に比べて、用法間の意味の開きは大きくなく、緩く全体を一つの意味としてとらえることもできなくはないであろう。これは、名詞ワケが他の形式名詞に比して、実質的な意味を濃く持っていることが理由であると思われる。

その実質的な意味とは、ワケの持つ原因・理由といった意味であると思われるが、この「原因・理由」の意味に關してもう少し検討を加えたい。井島(二〇一〇・三)などでも、現実世界の因果關係における原因—結果という關係と、認識主体の推論における理由—結論という關係とを区別した。というのも、この二つの方向が一致する場合もあれば、反対になる場合も存在するのである。次の例を比べてみたい。

(48) a (大学に合格したという報告を受けて)

それなら、ほっとしただろう／＊らしい。

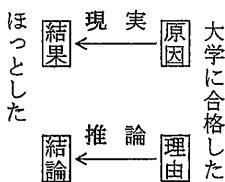
b (ほっとしている様子を見て)

大学には合格した＊だろう／らしい／のだろう。

この(48) a・bのダロウとラシイ(およびノダロウ)との使い分けは何に起因しているだろうか。ここで、現実世界の因果關係に關しては、「大学に合格した」が原因で、「ほ

っとした」が結果というように、変わりようがない。しかるに、それを話し手が認識する場合には、原因である「大学に合格した」ことを知って、それを理由として「ほっとした」という結論を推論する場合も、また逆に「ほっとした」様子を見て、それを理由に「大学に合格した」という結論を推論する場合もありうる。前者は、現実の因果關係の方向と心内の推論の方向とが一致するので「順行推論」、後者は、現実の因果關係の方向と心内の推論の方向とが反対になるので「逆行推論」と呼ぶことにしたい。そうすると、順行推論にはダロウが、逆行推論にはラシイあるいはノダロウが用いられるということになる。

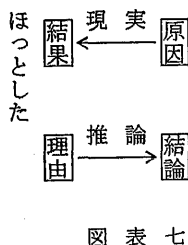
#### ・順行推論



六 表 図

・逆行推論

大学に合格した



ほっとした

ここで推量表現からワケダの用法に目を移すと、ワケダは(49) a・bのように、順行推論の場合にも逆行推論の場合にも用いることができる。

(49) a (大学に合格したという報告を受けて)

じゃあ、一安心したわけだ。

b (ほっとしている様子を見て)

大学には合格したわけだ。

勿論、多くの場合が順行推論であるが、たとえば(50) aの例は逆行推論を表わしていると考えられる。

(50) a 「どうした、おい、がっかりしたろう。お前がこの女とずつつきあっていたことは、そのお母さんの手紙で<sup>でも</sup>はつきり証明されたわけだ。そうするとお前

がさつきから言っていることは、みんな嘘だな。この女を知らないだとか、つきあっていないかっただとか、全部うそだな。……何のためにそんな嘘をつくんだ。

：

石川達三『青春の蹉跌』 464

b 私は身も心もまさしく敗残兵である自分の立場を搔摘<sup>かいつ</sup>まんて話した。すると彼女は直ちに駅の電話で庄原駅に連絡し、庄原と備後十日市の駅長の許可を得て同乗同行してくれた。そんな時間があるほど汽車は長く停車したわけだ。 井伏鱒二『黒い雨』 557

c 「学生の時出来た子だ。おやじに見つかって、別れさせられた。つまりは俺が意氣地がなかったわけだが、口をきいた兄貴が、感心にその子を里子へ出して育ててくれたんだ。俺にやなんにもいわずにね。俺あ学校出るとすぐ田舎へ勤<sup>きん</sup>口を当てがわれて、追っ払われたから知らなかった」 大岡昇平『野火』 68

ワケダがどちらの命題につくのかを見てみると、因果関係に関しては、順行推論の場合は結果に、逆行推論の場合には原因につくことになり、一貫性がないように見えるが、推論に関しては、順行推論でも逆行推論でもいずれも結論となる命題につくことになり、両者の振舞いは共通している。ということとはワケダは、現実世界の原因・結果命題のいずれにつくかという次元において働いているのではなく、話し手の心内において推論の理由・結論命題のいずれにつくかという次元において働いているということになる。

その点、カラダとは対照的であるということが出来る。すなわち、カラダは(51) a・bのように、現実世界の因果関

係において、常に原因命題につく。

(51) a \* 太郎が大学に合格したのは、太郎がほっとしているからだ。

b 太郎がほっとしているのは、大学に合格したからだ。  
ついでながら、先ほどの推量表現についてここまでの検討を踏まえて言い換えれば、推量表現は、心内の推論作用そのものを表わすものであるから、推量表現となる命題は推論の結論とならざるをえない。そのうえで精確に言い直せば、ダロウは、現実の原因を推論の理由とし、現実の結果を推論の結論として推論する順行推論の場合に用いられ、ラシイは、現実の結果を推論の理由とし、現実の原因を推論の結論として推論する逆行推論の場合に用いられるということになる。

さて、このようにワケダが、現実世界の因果関係ではなく、心的推論の理由―結論関係を表わす表現であるとする、因果関係以外にも、さまざまな関係を理由―結論としてとらえることが可能であるということになる。寺村（一九八四・九）の挙げる〈言い換え〉用法も、ある側面からそのように言えることを理由にして、別の側面からこのようにも言うことができる、と結論付けたものであると説明できることになる。実はそもそも、寺村（一九八四・九）で〈結論〉用法の典型例として示されている(52) a・b そのものが現実の因果関係をもとにした表現ではなく、推論の理

由―結論関係をもとにした表現であったのであり、そういう点では〈言い換え〉用法と大差ないことになる。

(52) a 信吾は東向きに坐る。その左隣りに、保子は南向きに坐る。信吾の右が修一で、北向きである。菊子は西向きだから、信吾と向い合っているわけだ。

川端康成『山の音』

b ところで、桑原武夫氏の「人間兆民」にある家族関係で、「ちの」が松沢吉宝の姪「わい」の私生児となっているのは、この原簿を見る限り間違いで、「わい」は吉宝の姪ではなく、亡姉であり、「ちの」はそのわいの私生児ですから、「ちの」が吉宝の姪に当るわけです。

松本清張『火の虚舟』

さらに〈確言〉用法のワケダに関しても、およそ寺村（一九八四・九）の議論通り、そのように結論付ける何らかの理由があるかのように装う、派生的な用法であると考えるのは妥当な位置付けであるように思われる。ただし、意味論的な意味が希薄になった分、談話的な意味を担うようになり、話し手は知っているが聞き手が知らないこと、あるいは話し手のなわ張りにある情報を述べる場合に用いられる、ということもあるかもしれない。

さらに〈納得〉用法についても検討を加えるべきであるが、この点に関しては井島（一九九八・二）でも論じている。ここにも理由―結論関係をもとにした推論が働いてお

り、その結論が、事前に入手していた情報と一致したところ（納得）の思いが生ずる、という趣旨であった。このように、ワケダ文は理由―結論関係をもとにした推論の結論部分を述べる表現であるという、基本的な意味機能を下敷きに、いくつかの用法に分かれていると了解できる。

#### 4・3 ワケダの否定形

ワケダの否定の形には、ワケデハナイ・ワケガナイ・ワケニイカナイの三つの形があることはよく知られている。それら相互の使い分けについても、すでにさまざまに論じられているが、およそそれぞれの意味用法は、それらの形式の成立過程から説明できるように思われる。

#### 4・3・1 ワケデハナイ

まず、最も頻用されるワケデハナイから検討していきたい。この形式はPハQワケデハナイ、すなわちPはQという結論にいたる理由ではない、という意味が本来のものであったと考えられる。すなわち、ここで否定が用いられるわけであるが、話し手はPという事実を提示したことにより、聞き手が心内でPならばQという因果関係を期待として想定し、Qという結論が得られると考えるだろう、と先

回りして予測し、それが実際とは異なると打ち消すのがこの表現であると考えられる。もつとも、このような経緯はすでに寺村（一九八四・九）でも指摘されている。

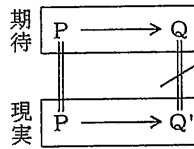


図 表 八

このように、聞き手（読者）の期待を打ち消す働きを持つていることは、以下のようにワケガナイがしばしば「別に、とりたてて、何も、尤も」のような副詞と共に起すことからも支持される。

(53) a 図書館もそんなひっそりとした街並の一部にあった  
図書館といつてもべつに他と変ったところがあるわけ  
ではなく、ごくありきたりの石造りの建物である。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』125  
b 老人が集中して食べたせいでキュウリはもう一切れもなく、残っているのはハムとチーズばかりだったが、私はとりたててキュウリが好きというわけでもなかったから、べつにそれはそれでかまわない。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』175



c ダ・ポンテは、モーツアルトに不思議なシンフォニイを書く機会を与えた。と言うのは、ここに肉声という素晴らしい楽器が加えられたという事であり、何も「ドン・ジョヴァンニ」という標題を有し、「ドン・ジョヴァンニ」という劇的思想を表現した音楽が現れたというわけではない。

小林秀雄「モーツアルト」97  
d 彼にとつてほんとうに肉体を持つとは、大きな鼻や不器用な挙動を持つ事ではなかった。その為に恋愛に失敗するという様な事では、更になかった。尤も、彼は、何事も避けたわけではない。彼は、そういう肉体を<sup>ひきこ</sup>提げ、人並みに出来るだけの事はやってみた。併し、大きな鼻と不器用な挙動では大した事は出来なかっただけである。

小林秀雄「モーツアルト」101  
e 多くの実業家はあきらめがよかった。世の中が不況の時ならことはべつで、怒りを感じてさわぎたてたかもしれない。しかし、いまはみな景気がよく、気分は大きかった。甘い汁にありつけなかったが、べつに損害をこうむったわけではない。

星新一『人民は弱し官吏は強し』95  
以上のように、ワケデハナイが用いられるのは、実際の結果は、何らかの根拠から予想される結果とは異なる場合、すなわち実際の結果と予想される結果とに、部分的に若干の相違が見られる場合であると考えられる。このようにワ

ケデハナイは、前提・焦点構造を持つ要素対比に用いられる。たとえば、(54) aは「半玉が「ああら、いやだ。」といった」のは事実だが「彼に向かって」言ったのではない、(54) bは「日本が（ほとんど）亡んだ」のは事実だが「亡びきりに（＝完全に）」亡んだのではない、(54) cは「この店にある人種は、（ある意味で）馬鹿である」のは事実だが「頭が悪い」のではない、(54) dは「国文科に入った」のは事実だが「はつきりした目的があつて」入ったのではない、(54) eは「慈海が檀家を廻る」のは事実だが「一人で」廻るのではない、(54) fは「そのボクサーが来日したのは」事実だが「観光のために」来日したのではない、といったことがある。

(54) a それは、あの半玉にしたつて彼に向つて「ああら、いやだ。」といったわけではない。人がいないと思つたのに、意外のところに人がいたものだから、びっくりしてああいってしまったのだらう。

山本有三『路傍の石』941  
b ほとんど亡びた、しかしまだ亡びきりに亡んだわけでもない、ということも知りました。そうして、われわれ捕虜もいつかは国に帰されることになっている――、そういうこともわかってきました。

c 都電停留所の四谷三丁目のちかくに、舟町という小

竹山道夫『ビルマの堅琴』78

さな町がある。ここは、宇野悠一の家がある大京町から歩いてすぐの場所である。この舟町の一角に、〈フール〉というスナックバーがあった。フールとはもちろん英語で馬鹿という意味である。物好きな男が洒落のつもりでつけた名前だったろうが、この店には本当に馬鹿な人間があつまっていた。店がひらくのは午後六時で、閉店は晩方の四時である。この間にこの店にあつまる人種は、テレビタレント、流行歌手、映画俳優の卵などである。彼等の頭が本当に悪いわけではない。

タレントや流行歌手になれた以上、人並以上の才能を持っていたし、映画俳優の卵であるからには、これまた人並以上の美貌をそなえていた。つまり彼等は馬鹿げた遊びしか出来ない連中だったのである。この店にはルーレット、麻雀が出来るよう場所が設けてあつた。

立原正秋『冬の旅』 582

d 高等学校時代、なんととはなしに文学が好きになり、女子大にも国文科に入ったが、はつきりした目的があつて国文科に入ったわけではない。

立原正秋『冬の旅』 167

e 孤峯庵には、五十八軒の檀家があつた。京都市内の中心部と、西陣あたりの機屋が多かつたが、慈海は五十八軒の檀家を一人で廻つたわけではない。一級、二級、三級と檀家の格式を勝手に分類して、三級の家に

は慈念を廻らせた。

水上勉「雁の寺」 66

f 四年前、かつて「無冠の帝王」と呼ばれたメキシコ人のボクサーが日本にやつて来たことがあつた。彼にとつては十数年ぶりの日本であるはずだった。「ロープ際の魔術師」という呼称によって恐れられていた彼も、すでに年齢は四十を越えていた。だが、彼は観光のために来日したわけではなかった。現役のボクサーとして、ボクシングをするために来たのだ。

沢木耕太郎『一瞬の夏』 100

このような構造の最も典型は、部分否定である。(55) a のような数量的部分否定にも、(55) d のような程度的部分否定にも用いられる。

(55) a 師は、ゆつくりと低い声で話した。「包囲網がせばまる一方なのは、きみも知っているだろう。市中では、食糧が不足はじめてきた。ガラタの居留区から運ばれてくるのが頼みの綱だが、居留区の全員が、この援助に同意しているわけではない」

塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』 316

b 「征服王」と形容されたマホメッド二世の戦績が、すべて成功で色どられていたわけではない。ベルグラード攻略は失敗し、ロードス島も陥ちなかった。しかし、これらに加えて、シリア、エジプト攻略も、マホメッド二世の築いた基盤をもとにして、孫のセリム、

そしてその次のスレイマン大帝の時代には実現する。

塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』483

c 私はとりわけボクシングのよいファンというのではなかったかもしれない。試合を見るため会場に足を運ぶ、というほどの熱心さはなかった。テレビで充分だった。そのテレビ中継すら、すべてを見ていたというわけではない。見たり見なかったり、という程度だった。しかし、なぜかカシアス内藤のテレビ中継だけは欠かさず見ていた。妙に気になったのだ。

沢木耕太郎『一瞬の夏』212

d 寿康館では、月に一回くらい、サナトリウムの患者たちを慰問するために映画会が開かれた。しかし私は、まだ病状がすっかり恢復していたわけではないから、そこに映画を見に行ったことはない。

福永武彦『草の花』5

逆に、全面否定を打ち消して、若干存在することを表わすこともできる。

(56) a 主任は、大きな茶碗を指でかこって言った。「佐山は、あのとおり××課の課長補佐として実務に通じていたから、まるきり安田と交渉がないわけではない。が、今まで調べたところでは、役人と出入り商人という関係を出ないようだ。裏で特殊な結びつきがあったという事実は、まだ浮んでこないのだ」

松本清張『点と線』191

b どのように病状がよくなったと医師に言われても、それで彼の不安がまったくなくなるわけではない。絶対に治癒した、と断言し得る場合は医学的に殆どない。ただ、誰々と較べて良いとか悪いとかいう、相対的な自己満足があるばかりだ。 福永武彦『草の花』18

また、限定表現を打ち消して、必ずしもそれに限定されないことを表わすこともある。

(57) a これは仲間の中で一番分別をわきまえている工科の木原。——この親友にも、鮎太は好感ばかり持っているわけではない。信子の義妹たちに取り入って、その

家庭教師のような役を買って出て以来、鮎太は木原をも隅に置けない奴だと思っている。それに信子が木原を一番信用していて、何かと相談役に彼を選ぶことも、鮎太には心外だった。

井上靖『あすなる物語』146

b しかしそうかといって、軍令部には形式主義の独善主義者ばかりが集まっていたわけではない、まして「国運を賭して」アメリカと戦争しようと思っていた人ばかりいたわけではない。 阿川弘之『山本五十六』763

c 勉学が厳しいとは言え、学生は本にばかり齧りついていたわけでもなかった。夕食のあとや宿題の少ない日曜日の午後などは、気の合う者同士が集まって、明治政府の政策や女性のあり方などについて論議が交わ

された。

渡辺淳一『花埋み』 238

ここで、補文中に不定語が用いられ、全面否定を表わす用法があるが、この場合、補文中の不定語とワケデハナイの否定辞ナイが呼応することになる。すなわち、不定語＋モ：ワケデハナイは否定辞をそのまま補文内に移動した、不定語＋モ：ナイとほぼ同義となる(58) aは「誰も見なかった」、(58) bは「なんの信仰ももっていない」とほぼ同義が、モを伴わない不定語を用いた用例も同様に全面否定を表わす。

(58) a 彼らが群れをなして町に侵入するところを誰も見たわけではなかった。しかし、おそらく夜の間にぞくぞくと溝や下水管や壁穴から町へ入ったのであろう。

開高健「パニック」 64

b 自分たちの指導者にたいしてなんの信仰ももっていないわけではない。

開高健「流亡記」 434

c あのことは、華岡家に住むひとたちは、誰も決して家の外の者に洩らしてはならないことだと決めていた。誰が云い出したわけでもない。皆がそれぞれにそうすべきだと考えたのである。

有吉佐和子『華岡青洲の妻』 183

ここで、ワケデハナイとノデハナイとを比べてみると、ノデハナイは他者(多く聞き手)の期待を打ち消して事実を述べる、PノデハナクQノダの形が多く用いられるが、

ワケデハナイはPワケデハナクQ(ワケダ)という形はほとんど見当たらない。これはノデハナイの場合は、Pを打ち消したからといって実際はどうであるのか明らかではないが、ワケデハナイの場合は、部分的な要素を打ち消すことで、実際どうであるのかを明示してしまうので、改めて実際どうであるかを加えると剰余表現になるためであると思われる(たとえば「全員来たわけではなく、来なかった人もいた(わけだ)」)。ただ、複数の要素を打ち消す、PワケデモナクQワケデモナイという表現は稀に見出すことができる(その点、(59) dの例は珍しいと言いうことができるだろう)。

(59) a 「…現在の君は、他日の創作のために、謂わば経験の蜜を貯えているわけだ。それは君が専門家だからだ、

芸術家、と言ってもいい。ところが僕なんか、そんなものは何もないさ、読者を考えて書くわけでも、発表をを考えて書くわけでもない、ただね、僕が今、此所にこうやって生きていることの証拠に、何か書いていなければ気が済まないというだけだ。」

福永武彦『草の花』 37

b 何年たっても一曲も書かせてもらえぬ先生たちが、制作室の壁際にたくさん立っていた。そんな先生たちは、ディレクター氏が入りするたびに、少しでも注目を引こうと腐心していた。彼らは、別に社に呼ばれ

たわけでもなく、用件があつたわけでもない。ただ、ディレクターや社員たちに忘れられないために、毎日そこに顔を出しているのだった。

五木寛之『風に吹かれて』 61

c 私はさつそく金子と日本のコミッションに足を運び、事務局の実力者と会った。内藤のランクを上げてくれるようにと頭を下げると、一笑に付された。ランクを上げるようないい試合をしたわけでもなく、上位ランカーが負けたわけでもない。韓国のコミッションに推すべき理由が何ひとつない。確かにそれは正論だった。柳戦が流れた事情を説明し、情状を酌量してほしいと喰い下がったが、正論によって退けられた。

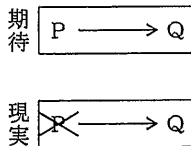
沢木耕太郎『一瞬の夏』 1141

d まだまだ事件はたとと起る。「奥」でひっそりと計画され、病院の連中には気づかれぬ事柄もある。聖子が、父親が白羽の矢を立てた青年とひきあわされたのだ。どちらも否認はない。たとえ否認があつてもそんなことは問題外だ。両家の間で事故めたやりとりがあつたわけではないが、こうして二人は事実上の婚約者になる。もちろん二人が交際をするわけではない。両家が交際をするのだ。

北杜夫『楡家の人々』 220

4・3・2 ワケガナイ

次に、ワケガナイについて見ていく。こちらも否定が用いられることから、聞き手のPならばQという期待を打ち消す働きを持つていると思われるが、Qワケガナイは、Qという結論が導かれる理由Pが存在しないという形で打ち消すことになる。理由Pが存在しないのであるから、そこから結論Qも導かれるはずはなく、強い打ち消しを表わすことになる。



図表九

ではこのような強い打ち消しを行うのはどのような場合であろうか。当該の事態が、およそ実現されようのない極端な事態であるような場合であろう。言い換えれば実現の可能性が極端に低い、可能性がない、という話し手の判断を表わすことになる。

ワケガナイの用例の特徴として、まずワケガナイが下接する用言には可能形が多いことが挙げられるが、確かに不

可能なことは、起きる可能性がないことになる（用例は以下のものの中に散見される）。

それから補文中に副助詞ナドがしばしば見られるが、これは（軽視・謙遜）あるいは（高評価）のナドと言われるものであり、当該事態を高く評価するにせよ、低く評価するにせよ、話し手が実現可能性が低い（ない）と判断していることを表わしていると考えられる。

(60) a 張柏端<sup>ちやうくたん</sup>ほどの仙術の達人でも、さあ出かけようというまぎわになって、たしかに玄關に置いてあったはずの沓<sup>くつ</sup>が見えなくなっているにはちよつとこまつた。さがしてみるまでもない、盗まれたにきまつている。しかもそれはたつた一足しかない沓である。もちろん何品に依らずかねて替りを用意しておくなどということがあるわけではない。

b 「黒、それは鯨<sup>くじら</sup>の煮つけだよ」と安が応じている。

「そうだろうな。お役人さまが俺達のようなものに松阪牛などを食わせてくれるわけがないものな」

立原正秋『冬の旅』508

c しかし、星は笑わなかった。自分が当事者では、笑えるものではない。また、このような一日が終つたあとに、笑うような精神的な余裕など残っているわけがない。

星新一『人民は弱し官吏は強し』320

d 外務省の課長の供述には「ウラジオストックに積出

すことに賛成したが、売ることの承認はしていない」という変な言葉があった。わざわざ運賃を払って船に積みこみ、高価な品を海に捨てに行く者など、あるわけがないではないか。

星新一『人民は弱し官吏は強し』405

e 皆はもちろん、まだ眠っていた。太郎は、杉山美幸が、ピンク地にブルーと白の模様<sup>もよう</sup>のついたネグリジェを着ていたようにも思ったが、それは夢<sup>ゆめ</sup>だったかしらん、と考えた。美幸のネグリジェ姿など、見られるわけがないのである。

曾野綾子『太郎物語』1115

f 断片的な、フィルムの切れ端のような、そんな思い出を拾い集めてみたところで、とうていそこから今の学生に一席弁じることなど、出て来るわけがないではないか。

五木寛之『風に吹かれて』377

また実現可能性の低さ（なさ）は、逆接仮定（譲歩）表現とも結び付きやすい。すなわち実現可能性を高めるような条件を与えても、やはり実現可能性が低い（ない）ことを表わす場合にも用いられる。

(61) a どう考<sup>かん</sup>えても、こんなエレベーターが消防署の許可を得られるわけはない。エレベーターにはエレベーターのきまりというものはあるはずなのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』13

b 僕は返答に戸惑った。いくら工場長の命令でも、僕

にお経が読めるわけがない。

井伏鱒二『黒い雨』 286

c そして一か月後には再び祖父から金をせびりだしたが、宇野悠一がいくら孫に甘いといつても、月に三万も四万も小遣い銭をだすわけはなかった。

立原正秋『冬の旅』 205

d 佐山を呼び出したのは、お時が亮子か。むろん、はじめはお時とばかり思いこんでいましたが、お時では、どうも辻褄が合わなくなりました。佐山とお時とは、なんでもないので、電話で呼び出しても佐山が応じるわけがない。佐山は一週間も、博多でその電話のくるのを、いらいらして待っていたのですから、お時では変です。亮子の方なら可能性があります。

松本清張『点と線』 385

e 慈念は池の向う側にある築山の楓の下で草取りをしていた。草取りといつても、まだ、庭の杉苔の中に丈高い草が生えるわけはない。

水上勉『雁の寺』 39

f パパは母に対してなんの幻想もいだかずに結婚したといっていました（母の美しさと家柄のよさだけをパパは結婚の条件としたつもりだったようです）、しかし、どんな感傷的でない男でも、自分が愛しているかぎり女からも愛されることを望まないわけはないでしょう。でも母から分泌されるものは皆無でした。

倉橋由美子『聖少女』 465

それとはある意味では逆に、順接仮定・確定条件表現と共に用いられて、ある条件が満たされたために実現可能性が低く（なく）なってしまうことを表わす表現も見出される。

(62) a サクライにも、三食一粒も残さぬ高志のくいっぷりはわかるし、入って二日三日ならまだしも、こう長くなつては、表から持ち込んだわけもなく、見当つかずに、それがお得意の、下からのぞき上げるようなガンジケをし、高志うす気味わるくなつて「俺、いっぺん食うたもんが、またここまで出て来よんねん」喉仏を指した。

野坂昭如『ラ・クンパルシータ』 345

b だが人と同じような生活や心を求めている、人々と違うことを成し遂げられるわけではない。私の求めているものは普通の女性が求めているのとは天と地ほどの違いがある。これでいいのだ。

渡辺淳一『花埋み』 308

c こう双方の母親が乗気となつては、この縁談がまともでないわけではない。こうして歐洲と千代子は結婚した。

北杜夫『榆家の人々』 913

また副詞モトヨリと共に共起する例も散見されるが、実現可能性が低い（ない）ことは話し手に限らず誰が判断してもそういう結論に至らざるをえない、という意味合いを表わしているのだろう。

- a 世間ばなしのていで、ふたりとも、さりげなく、茶漬まで食って、やがて座を立つた。そのおりに、坊主あたまのもらした一言。「うまくいったな。」そばにいた女中がふと聞きつけたが、なにがうまくいったのか、もとより気にとめるわけがない。ことばはたれの耳にも入らないにひとしかつた。 石川淳「喜寿童女」 611
- b 彼はそこにあつたロハ台に、荷物をまくらにして、ごろりと横になった。目をつぶってはみたが、もとより眠れるわけもなかつた。 山本有三『路傍の石』 493
- c 今のままでいてほしい、何気なくこのことをいうと、「そりやそうさ、いつまでもこれくらいでいてくれりや、いや、やつぱり二つかな、かわいさかりというから。どんどん大きくなつて、やがてお嫁さんになつちやう、どんな奴と結婚するのかな」貞三は、商売柄テープレコーダーを用意して、ハブビー、バブーなど伸子の片言を録音し、もとより私の脅えに気づくわけもない。
- 野坂昭如「死児を育てる」 255

## 4・3・3 ワケニイカナイ

ワケニイカナイには、「うまくいく」「計画通りにいく」「思うようにいく」などに用いられるような、《事態が進展する》といった意味の「いく」が用いられていると考えられる。

特に、「通りに・ように」に前接する語句は「計画・予定・予想・思い（思う）」というように、前もつてそうなるだろう、そうなつてほしいと考えた内容を表わすものに限られ、それがそのまま実現することを「通りに／ようにいく」と表現するもののである。ここにQワケニが代入されて、全体が打ち消されると、持つて回つた言い方になるが、(Qという結果をもたらず理由(P)が実現しない)(＝Qが実現しない)、すなわちQが不可能であることを表わす表現となる。

確かに、話し手あるいは動作主はそうしたいのだが、周囲の状況からそのことが不可能であること(状況不可能)を表わしている例を、多く見出すことができる。

(64) a ベッドに寝転んでいるとひどく眠くなつたが、このまま眠りこんでしまうわけにはいかない。眠つてしまえば何もしないままに何時間かが過ぎてしまうのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 1181

b 私は声をあげて泣きたかつたが、泣くわけにはいかなかった。涙を流すには私はもう年をとりすぎていたし、あまりに多くのことを経験しすぎていた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 1436

c 吾一はそとへ遊びに行きたかつたが、あいにくおつかさんもないので、買ってきたものを、置きっぱなしにして行くわけにはいかなかった。こんなにし



ていると、焼きイモがつめたくなってしまう。

山本有三『路傍の石』7

d おともらいかせぎは、もういやでいやでたまらないけれども、吾一は翌日もまた、出かけないわけにはいかなかった。きのう見つけておいた本願寺のお葬式に、彼はいつものように、おばあさんといっしょに、まぎれこんだ。

山本有三『路傍の石』522

e 「それなら、遠慮なく召しあがれ、レディが口をつけない先に、ぼくは食べたくても食べるわけにはいかないんです」佐倉が笑った。新田次郎『孤高の人』676

f それにしても昨日の髪洗いの途中で加恵を睨みつけた於継と、こうして瞑目している美しい老女とは、まるで別人のようであった。眼尻の小皺こそ目をこらせば見えるものの、その年齢と思えば口惜しくても美しいと認めないわけにはいかない。二年前に逝った妹背の母親の死顔と、加恵は心の中で較べてみて、於継の若さをも今更のように感じるのであった。

有吉佐和子『華岡青洲の妻』246

g 「彼」の幼年時代のことを聞きたいと思つたが、それはこの男に訊ねるわけにはいかない。「奥さんが失踪なさってからは、頼央さんや智広君のお世話をどなたがなさっていたのでしょうか」

筒井康隆『エディプスの恋人』155

h かかる重要問題をわりとかるく断定したので、イワン・イワンコッチャナイゼヴィッチ・イクライツテモダメダネフスキ議長は、いや気がさしたが、始めたばかりで閉会にするわけにはいかず、「ブンはほんとうに四次元の人間だろうか？どうであろう？」

井上ひさし『ブンとブン』167

他方で、話し手あるいは動作主の判断として、不可能であることを表わす用例も少なからず見出される。実際、(65)eのように「思う」の補文となる例も見出される。こちらは先の例とは逆に、そのことが不可能であることは、話し手あるいは動作主の希望と一致しているようにも思われる。たとえば(65)aは「黙っていたくない」、(65)bは「吾一をおばあさんのもとに置いておきたくない」、(65)cは「一旦出したものを引つ込めたくない」、(65)dは「ルビーをあめ納骨堂に安置しておきたくない」、(65)e「宇野電機を修一郎にまかせたくない」という希望も平行しているようにも思われる。しかし、むしろ望むと望まざるとに関わらず、周囲の状況から、そのような結論に至らざるをえないことを表わしているようである。

(65)a おめえにもなんかあるかい、と言われると、吾一は黙っているわけにはいかなかった。これでは、さも何

b 黒田は下のおかみさんに、自分は吾一の親類の者だ

が、吾一をおばあさんのもとに置いておくわけにはい  
かない。是非とも、すぐつれ帰らなければならぬとい  
とを、こんこんと話し、おばあさんが帰ってきたら、  
そう伝えてくれと言つて、おかみさんに立ち合つても  
らつたうえで、吾一のちいさな荷物を受け取つた。

山本有三『路傍の石』 546

c 「ふゝ感心なことをいうな。——しかし、わたしも  
一旦出したものを、引つこめるというわけにはいかな  
いね。」

山本有三『路傍の石』 803

d しかし、いつまでもあの納骨堂に安置しておくわけ  
にはいきません。イギリス人の遺骨が本国にかえされ  
るまでには、このルビーもどこかへ移さなくてはなり  
ません。それは人に知られず、荒らされないとこゝろで  
なくてはならぬ——、そう思つて、私はその場所をさ  
がしました。

竹山道夫『ビルマの堅琴』 355

e としをとるにしたがつてだんだん自分本位の考えし  
か出来なくなつてきたな、と理一は父がでて行つた戸  
を視つめ、父がなんと言おうと、宇野電機を修一郎に  
まかせるわけにはいかな、と思つた。

立原正秋『冬の旅』 482

## おわりに

筆者はこれまでノダ文について考察を進めてきたが、そ  
こで展開した考え方を、モノダ文、コトダ文、ワケダ文な  
ど形式名詞述語文全体に及ぼすことはできないか、という  
意図で本稿をまとめた。さらに周辺の形式名詞述語文、  
ハズダ文、ツモリダ文、トコロダ文などは、ノダ文を中心  
とする典型的な名詞述語文とどの部分が共通で、どの部分  
が違つてくるのか、さらに考察を進めていきたい。

## 資料

阿川弘之『山本五十六』・芥川龍之介『好色』・有島武郎『生れ出づ  
る悩み』・有吉佐和子『華岡青洲の妻』・石川淳『処女懐胎』・『華手』  
「焼け跡のイエス」・「張柏端」・「喜寿童女」・石川達三『青春の蹉跌』  
・五木寛之『風に吹かれて』・伊藤左千夫『野菊の墓』・井上ひさし  
『ブンとフン』・井上靖『あすなろ物語』・大岡昇平『野火』・開高健  
「パニック」・「流亡記」・梶井基次郎『冬の日』・川端康成『雪国』・  
北杜夫『榆家の人々』・倉橋由美子『聖少女』・小林秀雄『モオツア  
ルト』・沢木耕太郎『一瞬の夏』・椎名誠『新橋島森口青春篇』・塩野  
七生『コンスタンティノープルの陥落』・志賀直哉『小僧の神様』・  
島崎藤村『破戒』・曾野綾子『太郎物語』・高校編・高野悦子『二十  
歳の原点』・竹山道夫『ビルマの堅琴』・太宰治『人間失格』・田辺聖

子『新源氏物語』・谷崎潤一郎『痴人の愛』・筒井康隆『エディプスの恋人』・夏目漱石『こころ』・新田次郎『孤高の人』・野坂昭如『死児を育てる』・「ラ・クンパルシート」・林芙美子『放浪記』・福永武彦『草の花』・藤原正彦『若き数学者のアメリカ』・堀辰雄『風立ちぬ』・松本清張『点と線』・宮沢賢治『北守将軍と三人兄弟の医者』・水上勉『雁の寺』・武者小路実篤『友情』・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』・山本周五郎『さぶ』・山本有三『路傍の石』:CD-ROM版『新潮文庫S-100冊』

＊紙数の都合により、モノダ・コトダ・ワケダ文の周辺的な用法、および参考文献は割愛せざるをえなくなった。また機会を改めて掲載したい。

(いじま まさひろ 人文社会系研究科 准教授)